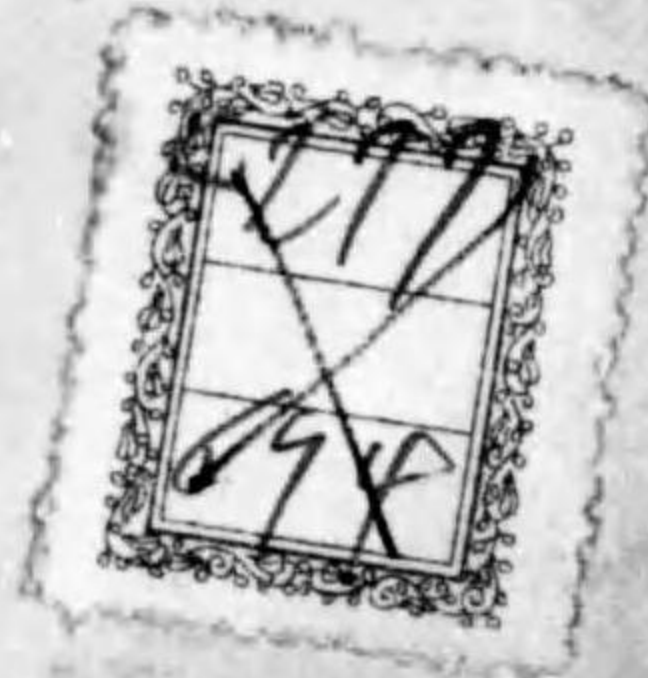
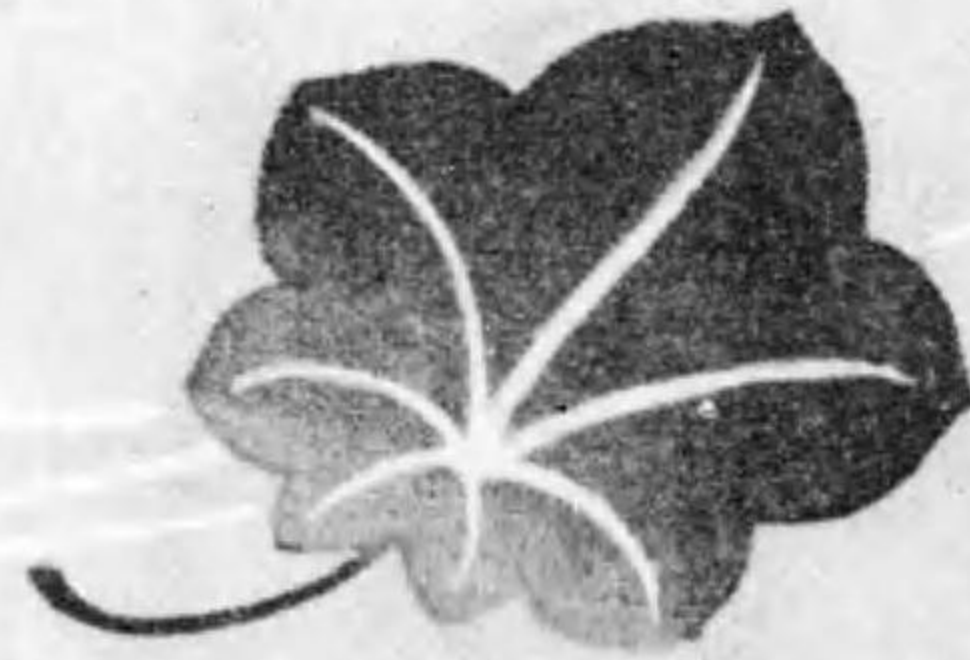
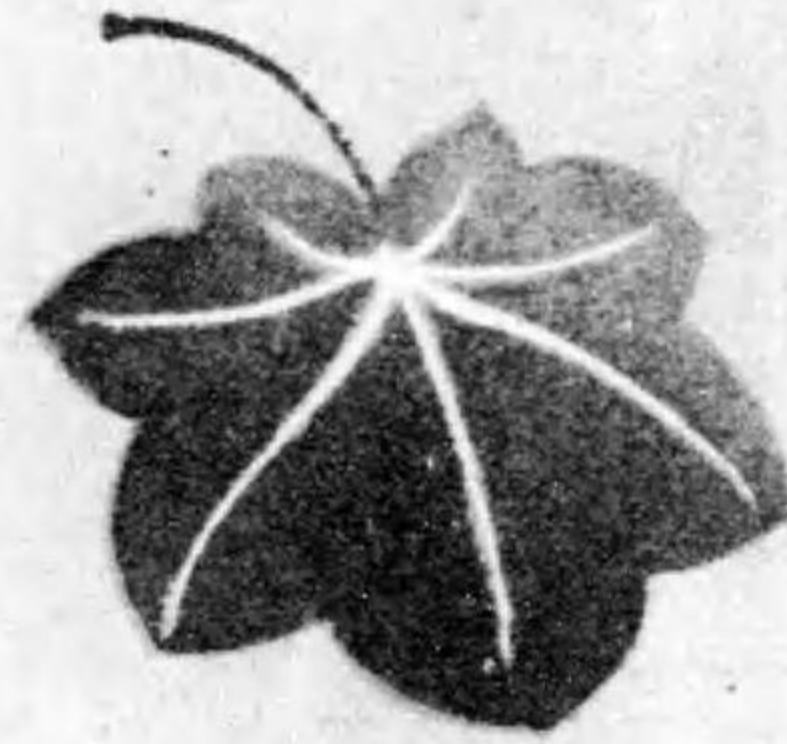


特105

375

橘刺紅

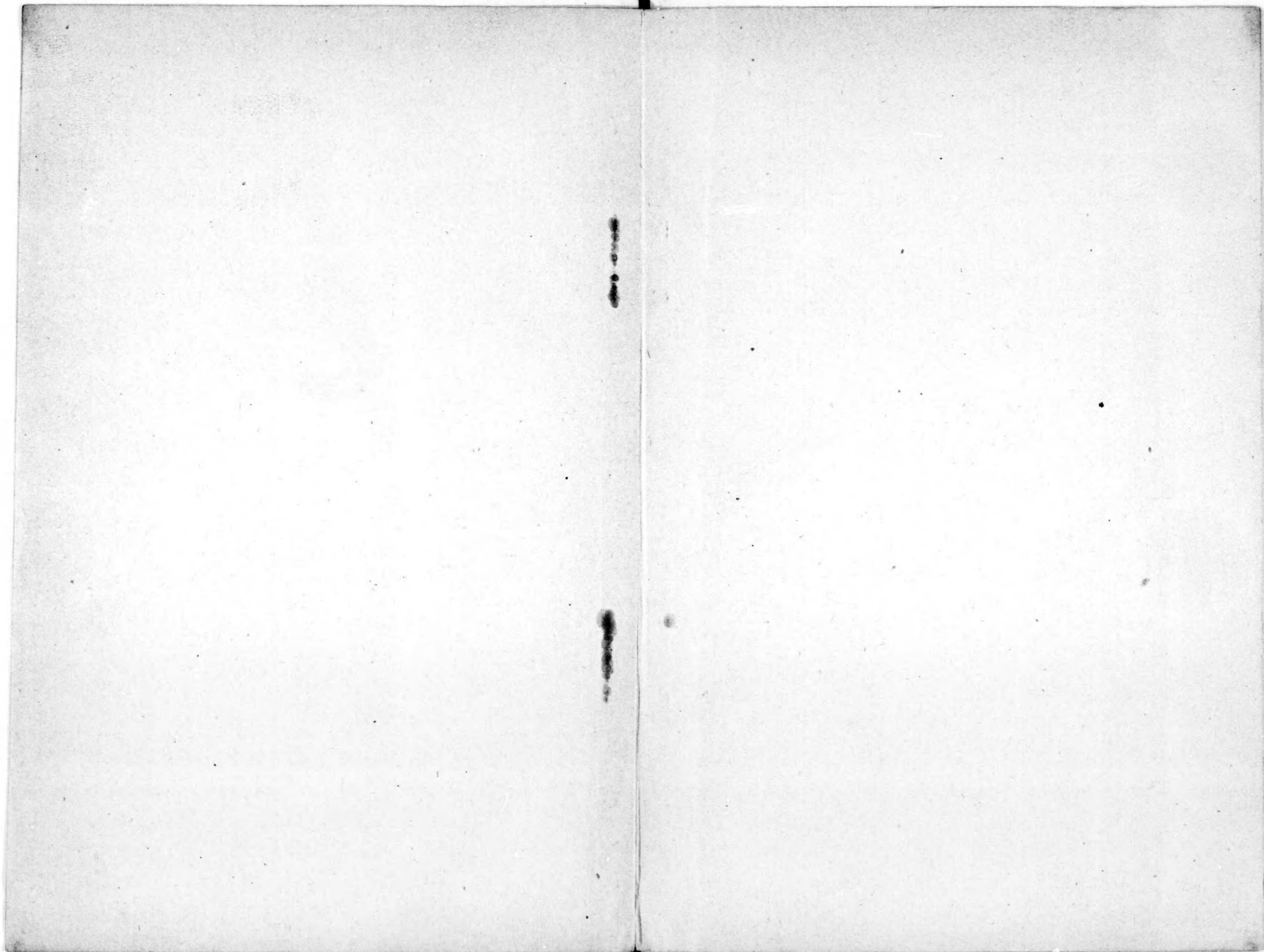
有情無情



始











特105  
375



大正  
5. 11. 30  
内交



# 有情無情

橘 刺 紅 著

お常婆つねはなやの住居うちは、僕ぼくの家の離屋はなれであつた。離屋はなれは屋敷やしきの西北にせきたの隅すみに在あつて、周圍くわいは母屋ははやと同様どうやう、古い大おほきな松まつの木きや檜ひのきの木きで圍かこまれて葉はの茂しげり罩こめる夏なつなどは、晝間ひるまでも家いえの中なかが眞暗まごくらであつた。離屋はなれはたつた二ふた室むろだけで、上あかり口ぐちの六疊むすよがお常婆つねはなやが、平常へいじょう寢起ねあきする部屋へやで、その奥おく



にある八疊の室といふのは、四十年來何人も入つたことも見たこともないと思ふ不思議な部屋であつた。其頃、延田の怪物部屋と云つて、世間で評判になつて居たのは即ちこの部屋であつた。

僕は生れ落ちるから、お常婆やの手で育てられた。僕の姉も兄も皆お常婆やの厄介になつて、大きくなつたのであるが、お常婆やは特に三番目に生れたこの僕を可愛がつて呉れた。僕は始終この婆やの住居に伴れられて往つて、お菓子を買つたり、面白いお話を聞いたり、婆や婆やで日を送つたものだつた。その僕が、婆やの住居に往つて、ふいと立つて奥の八疊の部屋に往かうとして、襖に手を掛けると、婆やは周章で、『坊ちゃん、其所を開けてはいけません。お怪が出ますよ』

と云つて引き止めた。

お怪と云ふものが、如何様なものであるか知りもせず、又、恐いといふ事を知らなかつた僕は、

『出てもいゝや、お怪を見るんだい』

と反抗して、無理矢理に襖を押し開けやうとすると、婆やは確かと僕を抱き占めてそれを拒んだ。一度これを拒まれてからは、何となく奥の部屋が氣になつてならなかつたので、毎日のやうにそれを覗いてやらうとしたけれど、何時も婆やに差し止められた。そして遂には、婆やは僕を母屋で遊ばせるやうになつて、滅多に離屋に伴れて往くやうなことがなくなつた。



六歳の時であつたらうと思ふ。何でも大雨の降る日であつたが、その日は朝から婆やの住居に往つて居た。相變らず色々な面白い昔話を聞いたり、繪草紙を見たり、兵隊さんの人形を並べたりして餘念なく遊んで居たが、婆やが一寸と便所に往つた時に、ふいと立ち上つて八疊の襖に突進した。

襖はわけもなくさらりと開いた。その部屋は、床の間もあり、違ひ棚もあり、押入も體裁よく拵らへられた立派な室であつた。室の眞中には美しい模様が付いた、厚いふく／＼した夜具蒲團が敷き延べられてその中に誰かゝ寝て居る様であつた。腕白者の僕は、直ぐ様飛び込んで、その夜着を引き剥いでやつた。すると其處には眞赤な衣物を着た、眞黒

な、人間の乾干のやうな者が寝て居た。僕はその赤い袖を引張つて見たが、重くて一寸と動かなかつた。そこで今度は裾の上前の方を引つ張つて見ると、黒い脚が一本ニヨツキり出た。もう一本ある筈だと思つて、下前の方を剥いで見たが他の脚は無かつた。

此時、ピシヤンと横面を張つた者があつた。痛かつたからわつと泣き出すと、僕を確かと抱き占めて、僕の顔をその胸に押し付け、聲を立てられぬやうにした。泣き聲を止めると、押し付けることを少し緩めたので、頭を上げて上を見ると、お常婆やが鬼のやうな顔をしてキツと僕を睨めた。その時の面相の物凄さ、口唇を食ひ切るばかりに噛み締めた二本の大きな齒と、あの人を睨め殺すやうなキロ／＼した凄惨い眼とは、今



六  
でもなほ瞭然と記憶に遺つて居て、何うかすると彼の時の婆やの顔が、眼前に浮んで来て、冷汗がゾツと流れることがある。實際その時の恐ろしさと云つたら、僕はキヤツと叫んで婆やの懐に潜るやうにしがみ付いた。

「坊ちゃん、情けない事をしてお呉れたねい」

婆やは此時初めて言葉を發した。そして、今度は、僕を抱き占めたまゝ、めそ／＼と泣き出した。

「婆や、御免よ、ねい婆や、御免よ」

僕は何とも云ひ得ぬ恐ろしさと、悲しさに襲はれて、泣き乍ら婆やに謝まり、且つ泣き絶つたけれど、婆やはたゞ泣くばかりで、何とも答へ

て呉れなかつた。

その夜、お常婆やは、その八疊の部屋で、首を縊つて死んで了つた。

二

翌る日は大騒ぎであつた。翌る日ばかりではない、其の後長い間大騒ぎであつた。お常婆やの死も、八疊に寝かされてあつた木乃伊も、四十年來の祕密も、すべて噂さは噂さを生んで、近郊近在の大評判となり大問題となつて、『延田家の大祕密』といふ事は、新聞紙の全面を埋めるだけの豊富なる材料を提供した。僕はその頃全く子供であつたから、お常婆やのあの恐ろしい顔と、八疊の部屋の真中にダラリと下つた婆やの屍



骸と、當時巡査がしきりに僕の家<sup>うち</sup>に往來した事との外は、殆んど記憶に遺つて居ない。然し事實は當時成人した人と雖も、これ以上にこの大秘密を知<sup>し</sup>ることは出来なかつたのである。二十有餘年を経る今日に到る迄この大事件は遂に解決されることなくして、有邪無邪の中に葬られて來たのである。大秘密は斯くして雲霧の中に包まれて來たのであるが、その大秘密の緒を作り出した腕白者の僕、即ち延田光雄は、この大秘密の黒幕を切り拂ふべき運命の子であつた。

お常婆やは、元、ある法界屋の小娘で流れ流れて僕の村迄、サ、ホーカイと癩走つた聲で歌ひ流して來た。その父といふのは非常な亂暴者で當年八歳のこの小娘を、大道の眞中で打つやら蹴るやら、酷い目に合せ

ることが屢であつた。この事が樸直なる田舎人の同情を蒐めたのであつたが、僕の祖父がその事を聞いて、見るに見兼ねて二十圓で此の小娘を買ひ取り、自家の家に置いて、小間使代りに、自分の子のやうにして育て上げた。

お常婆やは小さい時から温順な性質で、それに伶俐しいので、祖父からも家族からも、又、下女下男の果から迄よく可愛がられて居た。小學校も立派な成績で卒業し、年もだん／＼大きくなつたので、祖父は婿を貰つて家を持たせやうとしたが、彼女は何うしても諾き入れず、一生旦那様の家に厄介になつて居りますと、六十七で縊死するその時まで、遂遂獨身で押し通して來た。



お常婆やは死んだ。検屍も済み、葬式も終り、ゴタ／＼が一通り片付いた時に、僕の家には八年來奉公して居た下男の半造が、僕の父に向つてあのお常婆やの部屋にある木乃伊を呉れて下さいと願ひ出た。

半造は其頃未だ二十四歳の若盛りで、顔の白い眉の濃い眼の大きい、肥え太つた中脊の體格で、瓢輕な事はかり言つて人を笑はして居る快活ないゝ男であつた。大の忠僕で、僕の家には缺くべからざる大切の大切の下男であつた。

僕はこの半造が大好きで、時々半造と抱かれて寝たこともあつた。半造も亦お常婆やと同様、僕を非常に可愛がつて呉れた。一體僕は腕白で恐いもの知らずで、随分無鐵砲な子供であつたが、存外誰にも愛された。

ものであつた。併し、不思議なことには、僕の母は餘り僕を可愛がつて呉れなかつた。

半造が木乃伊を呉れて呉れと願ひ出た時、父は、『あれは未だ警察の方の問題になつてゐるのであるから、やることは出来ない』

と言つて斷つた。

『それは如何にも最もなこと御座ります。それでは、警察の方の片が付きましたら、是非あれを私に戴かして下さい』

半造は重ねて斯う願つたが、父はこれをも何かの口實で拒絶した。

その後の事はよくは覺えて居ない。多くは僕の居ない時、又は、僕が



居ても氣付かぬ時に、父と半造との間に何か話があつたものらしいが、その後間もなく半造は、突然僕の家を出て了つた。何でも父と恐ろしい口論をした後で、半造は、

『それでは宜しう御座います』

と一言云つた切り、ふいと出て往つて了つたのださうだ。

お常婆やが死に、半造が出て往つて了つた後の僕は寂しかつた。

『半造を呼び戻して頂戴』

と言つて、父や母に泣き縋つたことも、一度や二度のことではなかつた。

その頃、僕が始終氣にして居た事が二つあつた。一つはあの木乃伊の脚で、他の一つは、半造の行衛であつた。而して、木乃伊のことを思ひ

出すと、あの時僕を睨め付けた、あの恐ろしい婆やの鬼のやうな顔が、ニユウツと眼の前に現はれて來た。夢にも見た。幻にも見た。そして、その恐ろしい顔を見る度に、僕はキヤツと聲を立て、俯臥した。

## 三

僕の家のお隣りに、富塚さんといふ家があつた。親戚仲ではなかつたが親戚以上に極めて親密な交際を結んで居た。

富塚さんには、綾子さんといふ娘が居た。僕より一つ年下で、色の白い可愛い娘であつた。小さい時からのお友達であつたが、宛で兄妹のやうに親しくして居た。僕は腕白者だつたから、姉や兄とは時々喧嘩をや



つたものであるが、綾子さんと遊ぶ時ばかりは、極めて柔順で、亂暴もせず無鐵砲もやらず、至極仲よく遊んだものであつた。殊に、お常婆やが死んで了ひ、半造が居なくなつてからは、朝起きると直ぐ綾子さんの家に飛んで往つた。若し此方から往かなければ、綾子さんの方から『兄さん、遊びませうよ』と言つて來るのが常だつた。綾子さんは僕を呼ぶに兄さん、といつて、決して光雄さんと言はなかつた。僕は三十年來『綾子さん』と呼ぶことにして居る。

斯様に、僕と綾子さんとは、不思議に仲が好かつたので、小學校に居る頃などは、友達は僕等二人を呼ぶに『高天原』と云ふ綽名を以てした。これは僕の姉が命名した綽名で、蓋し、伊弉諾、伊弉册、兩尊の仲を云

ふので、畏れ多い綽名であるといふことが、その後五六年の後に判明つたが、當時は未だ歴史といふものを學んで居なかつたから、この意味がわからなかつた。意味はわからなかつたが、高天原と云はれると、何となく腹が立つて、

『何でもいゝやい』

と云つて拗ねたものだつた。すると、綾子さんは、

『何でもいゝわね』

とあの可愛い顔を突き出して、相談するやうに言つた。

その頃、僕の家のお土藏の後方に大きな栗の木が四五本あつた。秋になると熟した栗の栗毬が、大きな口を開いて居た。僕等高天原は、毎朝の



やうに此の栗の木の下に往つて、前夜の風に吹き落された栗の實を拾つた。風はさう毎晩吹くものでないから、栗が落ちて居ない事が多かつたすると、僕は手頃の小石を拾つて、栗の枝に打ち付けて實を落さうとしたが、なかく思ふ様に落ち来て呉れなかつた。綾子さんは一生懸命になつて僕に加勢し、小石を拾つて来ては、『もう一度、もう一度』と連りに石を投げさせた。兎や角する間に、二つか三つの栗は必らず落ちて来た。で二人は其れを拾つて家に歸り、爐邊に竝んで坐つて、その實を焼き乍ら仲よく食べたものだつた。何時だつたか、栗に傷を付けずに爐の中に放り込んで、ズドンとやられたこともあつた。

僕が七歳、綾子さんが六歳、即ち、お常婆やの亡くなつた翌年の秋だ

つた。ある風の吹く晩に、綾子さんは僕の家遊びに来て居たが、父が、『明日は栗が澤山落ちて居るぞ。どうだい、綾ちゃん、明日は栗の拾ひつこをしようじやないか』と言つたので、僕は綾子さんに談判して、其晩は僕の家宿ることにさせた。而して、朝早く起きるといふので、今迄遊んで居た繪合せを急に止めて、未だ宵の口なのに二人は圓くなつて床に入つた。床には入つたけれど、未だ眠くもないのと、それから栗が氣になるのとで、寝つかれなかつた。眠らうとすればする程眼が冴えて来るので弱つた。綾子さんも眠れないと見えて、もじく動いてばかり居たが、その度に、『静かにして早く眠らう』と言つて、二人とも一生懸命になつて眼をつぶつて居た。さうかうして居る内に、何時の間にか眞



實に眠つて了つた。夜中に二度三度眼を醒ましたが、未だ暗かつたから仕方なしにまた眠つた。

翌る朝は、とう／＼薄暗い内に床を抜け出して、高天原二人は土藏の裏目がけて突進した。土藏の前迄來ると、其處に母の晴衣が一枚落ちて居た。

『兄さん、いゝ衣物が落ちて居てよ』

『おや、お母さんのだよ』

『持つて行つて上げませうよ』

『うむ、そんなもの後でもいゝや。栗を拾はうよ』

『さうねい』

二人は衣物などは其方のけにして、栗の方に行つた。

父の豫言通り、栗は其處らぢう一杯に落ちて居た。二人は夢中になつて拾つた。綾子さんの前掛にも、袂にも一杯になつた。僕は裾を捲つて前の方を帶の間に確つかり挟んで、後ろの方を袋のやうにし、それに一杯栗を溜め込んで、

『もう歸らう』

と言つて先に立ち、急いで歩き出した。

『兄さん、急いじやいやよ』

後の方から言ふ聲がするから、振り向いて見ると、綾子さんは栗の重味で思ふ様に歩けないのであるのであつた。



此時、僕の姉も兄もやつて来た。僕は大きな聲で、

『寢坊やい、——栗なんかもうないよ』

と叫んだ。すると綾子さんは、

『未だあつてよ』

と正直に餘計なことを言つた。

姉も兄も何か言ひたさうな顔をして居たが、言ふ前にあの藏の前に落ちて居る衣物を見付けて、姉は慌て、母家の方に引返して行つた。姉の注進で母が急いで出て来たが、ふいと土藏の戸口の處を見て、

『あらつ、泥棒だつ』

と大きな聲を出して、狂人のやうに踵を返して家に馳け込んだ。

僕は、『泥棒』といふ聲に驚ろかされたが、それもほんの一瞬間で、栗の方が嬉しくて溜らず、綾子さんと一緒にいそぐと家に歸つて来て、例の通り爐邊に陣取つた。

外では、父や母や姉や下男や女中などが、何かしらガヤ／＼騒いで居た。

## 四

土藏を破つた泥棒は大勢であつた。盗み取られたものは、衣類や寶石や掛軸などで、金高に見積ると、凡そ一萬八千圓ばかりだと父が言つたのを記憶して居る。田舎のことだから、土藏は母屋から離れて建てられ



てある上に、隣家が遠いのと前夜風が強かつたので、泥棒が仕事が爲よかつたのだといふことであつた。

此の泥棒事件で、僕は二度警察に行つた。その頃の警察といふのは、あの長い棒を持つて居る巡査が居るものであつた。僕の印象にはたゞこれだけ残つて居る。もう一つ今から考へると變なことがある。僕のやうな子供を何故に召喚したかといふ事と、父や母や下男など、大勢の家族を召し出したかといふ事とが、何だか奇怪しくてならない。併し兎に角僕も一緒に警察まで出頭したといふことは事實である。最初に行つた時には、何だか面倒臭いことを聽かれて困つた。二度目に警察に行つたら、泥棒が澤山捕縛られて居た。頭數にして二十二人であつた。未だ此の外

にも連累があるのだとの事だつた。

父や母が警部と何か話して居る時、僕は退屈で手持無沙汰だつたから、先刻見て承知して居る牢屋を見に、半分は恐々ながらこつそり出かけた。頑丈な材木格子の隙間から、うよく／＼して居る泥棒を、そつと覗いて見ると、その中に目の大きな鼻の高い色の白い男が居た。その男を見ると、僕は思はず、

『半造』

と叫んだ。男は驚ろいたやうに、一寸頭を上げて僕を見たが、

『やつ、坊ちゃん』

と云つて、直ぐ立ち上り、つか／＼と格子の處まで来て、懐かしさうに



僕の顔を見て、ポロ／＼と涙を流して泣き出した。僕は小さい手を格子の間から差し延べて、半造の手を握った。

『半造、出てお出でよ。そして、一緒に家へ歸らうよ』

『エツ、坊ちゃん、一緒にお家に——？ まあ、坊ちゃんは、この半造が恐くないんですか。泥棒の半造が恐ろしくくないんですか』

半造は泣き乍ら慍う言つて、額を格子に押し付けた。

『お前泥棒なのかい。嘘だい。髯が無いじゃないか』

其頃の僕は、泥棒といふ者は、ムシヤ／＼髯の生へた、眼のギロ／＼光る、鬼のやうな者だと信じて居たのであつた。

『まあ、坊ちゃん、そんなに半造を思つて下さるんですか。勿體ない』

僕には此の言葉の意味が判らなかつた。

『半造、早く出てお出でよ。お前何故こんな處に入つて居るの。牢屋は悪いことをした人が入る處なんだよ』

『坊ちゃん、半造はね、悪いことをしたんで、斯様處に入れられたんですよ』

『ナニ、嘘だい、嘘だい。半造は悪い事なんかしないんだ。早く出ておいでよ』

此時巡査が来て、僕を引摺るやうに格子から離し、

『坊ちゃん、もう彼方へおいでなさい』  
と言つた。



『いやだ。半造を出さなけりやいやだ』  
口を尖らして斯う言つた。

『はい、出して上げますよ。用事が済めば出して上げますから、まあ、彼方へおいでなさい』

『ほんとうに出して呉れるの？ 何時？』

『それはわかりません。まあ彼方へお出なさい』

巡査はあやふやな事を言つた。此時、僕の頭に名案が浮んだ。

『半造、待つておいで。今出してやるよ』

と大人めいた事を言つて、何も言はずにすたくと警部の居る部屋に行つた。後から巡査が従いて來た。僕は直ぐ様警部の前に行つて、肩をう

んと突つ張つて、ありつたけの元氣を出し、ありつたけの聲で、

『半造を出して下さい。僕の好きな半造を、何故牢屋になんか入れたんです。早く出して下さい』

と言つた。警部はニヤ／＼と笑つて居たが、後ろから母が、僕を引き寄せ乍ら、

『光雄、何です、そんな事を云ふものじやありません。あんな恐ろしい泥棒を牢屋から出されるものじやありません』

『否だ、否だ、半造は泥棒じやないんだ。半造は今牢屋で泣いて居たんだ。泥棒が泣くもんか。家へ伴れて行くんだ』

兩足でどたくと床を踏み乍ら、泣き出して駄々を捏ねた。併し、名案



も遂に駄目だった。

その日家に歸つて来る途中でも、家に歸つて来てからも、半造のことで散々暴れた。餘り暴れ過ぎたので、果ては誰も相手にしなくなつた。一體、僕は斯うして駄々を捏ね始めると、なか／＼頑強な質で、父などが遂には肝癪を起して、僕の頭を打つやうなこともあつたが、打たれたり叱られたりする位で、ヘコタレル僕ではなかつた。それで父母もよく僕の強情を知つて、斯様な場合に決してヒドク叱つたり打つたりするとはなく、その儘放擲て置いて、毫しも相手にしなかつた。すると、僕は根負がして、黙り込んで了ひ、顔を膨らして居たものだ。その日も例の通り顔を膨らして不機嫌で居ると、夕方綾子さんが遊びに來た。綾子

さんは僕の緩和劑である。僕を巧みに繰縦には先づ綾子さんを利用すべきである。

五

一體、僕の家といふのは、片田舎にあるんだけど、近郊切つての舊家で、元は殿様の重い家來であつたとの事だ。殿様が時々おいでになつた事があるとかで、家の造りなどは馬鹿に大きく、弱蟲の兄などは晝日中でも、一人奥の室になんか行けなかつた程、大きなお寺のやうな家だった。

家の周圍は堀で圍まれて、その堀の縁には松や樺や栗などが一杯に生



ひ茂つて居て、自然の堀垣を成して居た。宛で林の中に建てられたお城のやうなものであつた。入り口は東西南北の四方に橋があつて、東の方向が正門だつた。綾子さんの家は南の門を抜けると、直ぐ其處にある大きな家だ。

僕の家は元大金持であつたらしい。これはその家の大きかつたことでも、また藏が澤山あつたことでも、それから小作人とかいふ者が大勢あつたことでも察せられる。それが今では貧乏になつて了つた。まあこんな事はどうでもいゝとして、話は前に戻るが、あの泥棒事件は何んな手續をしたものか、泥棒は皆放免されて了つた。併し、僕の好きな半造は家に歸つて来て呉れなかつた。

その泥棒事件があつた翌年、即ち僕が八歳の時だ、何でも秋の中頃であつたらう。栗の實がそろ／＼赤くなりかけた頃だと覚えて居る。或晩『火事だつ』と云ふ聲に叩き起された。朦朧たる目を開いて見ると、四邊は眞暗だ。それでも僕の手を引いて居るのは、母であるといふことだけは、確かにわかつた。引かれるまゝに、表立關の方に行つたらもう火が一杯だ。それから慌てゝ裏口の方へ廻つたが、此方も火だ。何ちらに行つてももう火が廻つて、出る事が出来ない。あちらでも、此方でも、泣く聲や叫ぶ聲やわめく聲が聞こえた。家の中では女中や何や、皆うろして居た。母も大きな聲を出して何かしら怒鳴つた。腕白な僕も此時ばかりは、『恐いよう、熱いよう』と云つて泣き出した。



うろ／＼して居ると、突然僕の前に眞黒い人影が現はれた。頭から何かすつぽり被つて、火の中を突き抜けてやつて来たものらしかった。そして僕をむんづと扼んで母の手から引き放したかと思ふと、グツと脚を上げて母の横腹をどんと蹴つた。母はよろ／＼と後退りしてバツタリ倒れた。僕は『母あちゃん』と大きな聲で叫んだが、その時はもうその人影が僕を抱いて、火の中を突破つて外に出た時であつた。

外に出るとその人影は、僕を抱いたまゝ南門の處に馳けて来たが、ザンブと堀の中に飛び込んだ。さうして向ふ岸に泳ぎ着いて、またすたすたと馳け出したが、綾子さんの家の前まで来ると、僕を投げるやうに下に置いて、『そうれ』と云つた。その聲は確かに半造の聲だつたが、後振

り返つた時にはもう影も形も見えなかつた。

その時までは、殆んど夢中になつて居た僕は、ふいと氣付いて四邊を見ると、綾子さんが女中に抱かれて、ワク／＼慄え乍ら火事を見て居るのが第一に眼に入つた。綾子さんは僕を見ると、直ぐ下りて僕の側にやつて来た。僕と綾子さんとは、しつかり手を握り合つた。

堀の中に飛び込んだので、僕はビシヨ濡れになつて居た。そしてこの時急に寒さが身に沁みて、ブル／＼と震え出したのを、綾子さんの家の女中のおさよが氣付いて、

『坊ちゃん、お着換へなさらないといけませんよ』

と云ひ乍ら、綾子さんの家に引つ張つて行つた。綾子さんも後から付い



て来た。おさよが何を着せてあげませうね、と心配して居ると、後から綾子さんのお母さんがやつて来て、

『仕方がないから、まあこれで我慢しなさいね』

と言つて、綾子さんの綿入れに襦袢を重ねて呉れた。平常ならなか／＼こんなものを着る僕ではなかつたが、この時ばかりは溫和しく袖の長い女の着物を着た。

『似合ひますよ、ホ、ホ、』

おさよが斯う云つて笑つた。

『馬鹿あ』

と僕がいふと、

『おさよ、笑つちや駄目よ』

と綾子さんが僕に同情して呉れた。それでも、綾子さんも矢張り可笑しかつたと見えて、ふふと笑つた。上體の方は兎に角だが、下の方を見ると脛がニヨツキリ二本出て居るのが、自分乍ら變だと思つた。

『この混雜に笑ひ事じやないよ』

と綾子さんのお母さんが、おさよを叱つたやうにも覺えて居る。

火事は翌る日の晝過ぎになつて、やう／＼鎮火した。全焼とは此事で、一物残らず全く灰燼に歸して了つた。家の周圍の堀の橋を皆落して、母屋の四方二十七ヶ所から放火したのだといふことだつた。家の中に居た人々は、窓を破つて逃げ出したり、湯殿の格子を破つたりして、大抵の



者は命だけは助かつたが、それでも母と叔母と女中の菊と敏とそれから下男の辨治との五人が焼死して了つた。馬は六頭皆死んだ。僕の大切の大黒鼠も死んだ。土藏も打破られてその中に放火されたので、僕の家七珍萬寶皆灰燼に歸して了つた。四方八方の消防夫連が、雲霞のやうに集まつたけれど、もう何うにも斯うにも手が付けられなかつたさうだ。放火の嫌疑は、勿論彼の泥棒連にかゝつた。半造はその頭だらうと云ふことだつた。

此の時、彼のお常婆やの家も焼けたが、同時に木乃伊も行衛不明になつた。誰人もあの木乃伊が焼失したらうとは云はなかつた。

こゝに千古の怪事が一つある。それは僕の母が焼死したことで、是は

確かにあの半造が蹴倒したが爲に、この厄に遭つたのである。然しこの秘密は、今日もなほ僕の胸にのみ秘められてあつて、世の萬人は焼死したのだとのみ信じて居る。その秘密を匿して居る僕を、死んだ母は彼の世から怨んで居ることであらう。けれども、僕はこの秘密を言はうとするとは一種の恐怖心に襲はれて、口が急に緘んで了ふのである。

母は他人の手で殺されたのだ。これを知る者は僕ばかり、こゝに於てか僕の胸には更に大なる悶えが一つ加つたのである。僕は運命の翻弄兒だ。



放火犯人は判明らなかつた。少くとも僕の記憶では、放火犯人が捉へられたといふ話を聞かなかつた。世間では可成り長い間、延田の大火事事件を噂さにして居たやうだつたが、僕は火事があつてから四五日経つたら、もう其様なことなどは忘れて了つて居た。

新しい家が山來上る迄、僕は綾子さんの家に厄介になつて居た。父や其の他の家族は村外れの空家を借りて、其處に住つて居たが、僕だけは特別に綾子さんの家に行つて、家中の者から可愛がられて居た。

「僕は綾子さんの家の人になるんだ」

と、口癖のやうに言つたものだが、其度に綾子さんのお父うさんや、お母さんは、

「眞實になるんですよ」

と言つてニコ／＼して居た。

斯様なこともあつたが、月日の経過は早いもので、何時の間にか僕の年は増えて行つた。餘り無事でもなかつたが、兎に角腕白の面目を失はずして、小學校も芽出度く卒業し、中學校に入ることになつた。中學校は僕の郷里から二十里も離れた處にあるので、自然綾子さんとも別れなければならなかつた。

中學校に入つてから、僕はよく綾子さんに手紙を書いた。朝に書いたのを忘れて、その日の夕方また認めて、一日二通の手紙を出したこともあつた。綾子さんから來る手紙は、何時も綾子さんのお父うさんのと同



封であつた。綾子さんのお父うさんは、時々お小使だと言つて、小爲替  
で一圓か二圓位づゝ送つて下さつた。嬉しかつた。

夏休みなどに家に歸る時には、必ず特別なお土産を一つ買つて歸つ  
た。そして庭の築山の蔭などに綾子さんを呼んで、『誰にも見せてはいけ  
ませんよ』などと言つてそれを呉れたものだ。處が休暇が果てない間に  
それが露顯して、女中などに散々冷かされて顔を赤くした。

それでも親達は何とも言はなかつた。綾子さんのお父うさんなどは、  
『高天原だからさ、ねい』  
なんて、却つて辯護して呉れた。それもその筈、僕と綾子さんとは、生  
れ落ちたばかりの時から、許婚の仲であつたのだ。それを知らぬ僕等高

天原は、無邪氣に楽しく永い間斯うして仲よく暮して來た。二人が仲よ  
くすればする程、親達が喜んだのも無理がない。

僕は腕白であつたけれど、決してわからずやではなかつた。

『子供は腕白な方がいゝ』

何か腕白をやつて、お母さんに叱られる時など、綾子さんのお父うさん  
は斯う言つて僕を庇つて呉れた。(僕は一々綾子さんのお父うさんと云ふが、  
これは子供の時から口癖で、決して富塚のおぢさんなどと云つたこと  
がない。お母さんだけは、時々おばさんと云つた。)

中學校に入つてからも、大分腕白をやつた。習字の時間に、僕の大好  
きな漢楚軍談を讀んで居たら、習字の先生が散々叱つた末、『そんな不真



面目な者は、今後教室に來なくともいふ』と云つたから、其時以來習字の時間に教室に出たことがない。何時も學校の側手の小山や運動場の隅や、雨の降る日には雨天體操場や圖書室などに行つて、戦さ物語や英雄傳などを讀んで居た。さうすると先生が呼び立て、叱責したが、八の字髯や光る眼や大きな聲位に降參するやうなことはなかつた。級監督の先生にも叱られた。校長にも二三度呼び出されて、なだめられたり叱られたりしたが、頑強に意志を挫げなかつた。すると、それでは退校を命ずるとか云つて脅したから、

『宜しう御座います』

と言つた。そこで、校長先生も遂々我を折つて、習字の時間には出なく

ともいふといふ特別の恩典を加へて呉れた。一心盤石を打ち貫いたが、お蔭で字は今でも極めて拙い。一生の損をして了つた。此頃その時の校長さんに會つたから、

『學校に居た時、習字をやればよかつたのですが――』

と、悔悟の言を吐いたら、

『君の強情には閉口したよ。あれで外の學科が成績が悪かつたら、退校でも落第でもさせなけりやならなかつたんだが、外の成績が馬鹿にいゝので、君の才が惜しいと思つたから、職員會議の結果、あんな例外な許しを加へたのであつた』  
と言はれた。



ストライキもやつた。數學の先生も幾何のムツカシイ問題のやうに、ヒネクレタ先生が居たから、『あの野郎、生徒を少つとも可愛がつて呉れない。何も出来ない癖に——』といふ悪口を言つて居たが、結局悪口だけで承知が出来ず、一つ諛めてやることにした。理由は元より單純である。由來中學生などのストライキの理由などは、極めて無邪氣淺薄なもので、感情一點張りのものである。感情を以て激發すれば、中學生は何時でも動く。温情を以て制すれば彼等は涙を流して詫びる。御し易いのは單純なる思想を持つて居る人間だ。僕は例の腕白調子で、元氣満々大

に説き付けたら、彼等は雙手を舉げて賛成した。殊に平常餘り成績のよくない、數學の出来ない連中などは、眞先きになつて此舉に加つた。責任は主謀たる僕輩延田光雄が、誓つて全部を負ふことにした。

ドングリ——これは先生の綽名である——が宿直の晩に、一隊九十八名のストライキ團が、手に手に小石を擲んで、宿直室の外に集まつた。僕は木劍を握つて宿直室の中に入つて、一打に殴り付ける役だ。平素修練した擊劍の手並みを見せる野心もあつた。宿直室の戸口迄忍び寄つて、ピーと合圖の笛を吹いたら、外に居る連中が一時に小石を宿直室の窓に向つて投げ付けた。窓硝子は一枚残らずメチャクだ。電燈も打ち毀されて了つたので、室の中が眞暗になつたが、幸ひに月夜だつたから、



人影だけはボンヤリ見えた。ワーツといふ関の聲が、バラ／＼と投げ付ける石の音と共に起つた。ドンダリは餘程屹驚したものと見えて、寢巻の儘宿直室の外に飛び出して來た所を、僕は頭では可哀さうだと思つたから、肩の處を力一杯に打ち下した。するとドンダリは、平常の廣言に似合ずキヤツと言つて尻餅をついた。

そのキヤツといふ聲を聞いたかと思ふと、僕は眼の前に、あのお常婆やの恐ろしい顔が、ニユーツの現はれたのを見た。この時には流石にブル／＼と身慄えしたが、それはほんの一瞬間であつた。

『先生、僕は延田です。罰は明日極めて下さい』  
と斯う言つて引き上げた。僕が揚々と引き上げて行くと、外の連中はま

たワーツと関の聲を擧げて、萬歳ツと叫んだ。

ストライキ事件は、僕が最初に誓つた通り、僕一人で全責任を負つた。校長の訊問を受けた時、

『あれは、僕が頭を下げて頼みましたので、決して共謀したのではありませんから、責任は全く僕一人にあるのです』

と言つた。當時の僕としては、頗る上出來の辯解であつた。この辯解は効能があつた。あれ程の重大事件が、遂に僕一人だけの處分で事済みとなつた。最も、當時の校長といふのは非凡な人間で、如何なることがあつても、生徒の辯解さへ立てば罰しないといふ方針であつた。彼の中學生觀は、要するに、『彼等少壯の生徒共は、無邪氣で無知で生意氣で血性的



のものであるから、彼等が亂暴をしたり、不正行爲をしたりするのは、無知の結果、感情の結果、無分別の結果に過ぎない。故に彼等の行爲を罰するのは宜しくない。寧ろこれを矯正するのが學校の本務である』といふのであつた。

兎に角僕の罰は職員會議で決せられた。職員會議の折、ドンダリは『私は此の事件から罰を受ける人を出したくありません。若し罰しなければ掟が立たぬといふことでありますならば、主謀者たる延田一人を罰して、他は赦してやりたいものです。あの延田は、亂暴はするが無分別の生徒ではありません。それに成績もよし、活氣もあるし、前途有望な生徒でありますから、この事件の爲めに退校處分をするといふことも、

如何であらうかと思ひます。あの晩の如きも、立派に名乗りを擧げて、逃げも隠れもしなかつた處は、私の氣を大いに動かしました。私は生徒を罰するといふことは、その生徒の將來を考へた上に適當に罪を科するのが、最も正當な事と思ひますから、延田の罰はつとめて寛大にせられ度いのであります』

と、飛んでもない宏量を以て恩誼の沙汰を申し出したさうだ。此のお蔭で僕は一ヶ月の停學で納まりが付いた。

停學を命ぜられた日に、僕はサツサと荷物を拵らへて、故郷に歸つた。そして、これくの事件で、停學を命ぜられたから、その間家に歸つて來たのだと云つたら、父はたゞ笑つて居た。そしてその翌日新聞に、僕



の名が出て居るのを見て、

『光雄、お前も偉くなつたなあ。新聞に名が出るやうになつたからなあ』  
と言つたから、

『なに、もう少し経てば、毎日出るやうな人間になります』  
と大きなことを言つてやつた。

停學一ヶ月の間は一生懸命になつて勉強した。綾子さんとも碌々話す暇もなかつた程、精を出して勉強した。生れて以來今日に至る迄、あの時程熱心に勉強したことはない。それは、停學の期が終つて學校に歸つた時に、同僚に負けるのが厭だつたからである。丁度その時に、高等學校に行つて居た兄が、病氣の爲に家に歸つて靜養して居たが、これを先

生にして、學科の全體をどしどしやつて除けた。

『光雄、お前の頭はいゝ頭だなあ』

兄貴に褒められたのは、生れて以來、此時が始めてであつた。

停學の期も果てたので學校に歸つた。歸つて見たら、學科の方は僕の方が餘程進んで居た。先生方は皆へんな顔をして居た。僕はあの時程痛快を感じたことがない。

こんな腕白の例は、イクラでもある。西洋にバツド、ボーイス、ダイアリー（いたづら小僧日記）といふのがあつて、その主人公も大分始末に終へぬ者であるが、僕にも此の主人公に劣らぬ程の種がある。然し、もう大抵切り上げなければならぬ。



處で、こゝに身邊に色々な事が起つた。その第一は、兄貴が死んだことだ。第二は、綾子さんが東京に行つたことだ。第三は、姉が兄の跡を追うて、彼の世に行つて了つたことだ。それから第四としては、僕の家が貧乏になつたことだ。併し、かゝる事は世間にアリフレたことであつて、轉變流離の憂へは致し方もない次第である。金持が貧乏になつた處で、生れたまゝの本來の空拳に還つたのだと思へば何でもない。生きて居た者が死んだ處で、生者必滅とアキラメて了へばそれ迄だ。僕は、苦痛とか、悲哀とか、何とかいふものに對して、子供の時から存外無頓着であつた。或は無神經なのかも知れぬ。

が、しかし、綾子さんの上京に至つては、僕輩と雖も、上のやうな筆法でアキラメルことが出来なかつた。大不平大不満足であつた。ナニこれも綾子さんの修業の爲だと思へば何でもない事なんだが、一體綾子さんが東京に行つて、厄介になつて居る家といふのは、僕の叔父の家で、この叔父が、僕輩の徹頭徹尾大嫌ひな人間であるから、なかく何でもなく過すことは出来なかつた。

綾子さんが東京に行つてからは、毎晩のやうに綾子さんのことを夢に見た。又、一寸でも氣を落ち付けると、直ぐ綾子さんのことが考へられた。その頃から、木乃伊——お常婆や——半造——綾子さん——貧乏な自分の家——これ等のものが、始終交る交る僕の頭の中、眼の底、胸の内、現はれたり、浮んだり、見えたり、思はれたりして、言ふに言は



五十四  
れぬ煩悶が湧いて来た。而して、時々、深い暗い不安な考へに沈むことがあるやうになつた。

八

或日、學校から歸つて来て、自分の部屋に入り、机の前に坐つて、茫然物を考へて居ると、其處に下宿のおばさんが入つて来た。

『あら、又、何か考へ事をして居らつしやるのねえ』

『そんなことはありません』

『延田さん、あなた此頃はどうかして居らつしやらなくつて？』

『いゝえ、別に何うもしません』

『でも、時々鬱いばかり居るじやありませんか』

おばさんは、斯う言つて心配さうに顔を曇らしたが、直ぐ、

『書生さんなんか、そんなにくよくよするものぢやありません。さうれ綾子さんから手紙が來てゐますよ。ほゝゝ』

軽く笑つて手紙を差し出した。

僕が下宿して居た家といふのは、女家族でおばさんと女中との二人暮りしであつた。おばさんの夫といふのは軍人で、日清戦争の時に戦死したといふ。おばさんは二十七八の面長な哥磨式の美人だつた。何時も洗髪にして櫛巻にばかりしてゐる人で、滅多に外に出ることがなかつた。月に一度づゝお寺詣りをする位が外出の大仕事で、一年に二度位は芝居に



行くこともあつた。僕が同居してからは、賑やかになつてよいと、大變悦んで居た。袴の綻びや洋服の破れなどを繕つて貰つたことも、十度や二十度のことではなかつた。シャツ襦袢の果まで洗濯もして呉れた。僕は例の筆法で、時々校長先生に喚び出されたり、先生方に叱られたりするのを、非常に心配して、自分の子のやうに戒しめても呉れた。それでも、時々訪ねて来る隣り近所の人や、親類の人などには、僕のことをウント褒めそやして話して居た。

僕は時々色々な話をして聞かせた。橘姫の話をしてやつたら、『それは知つて居ます』と言はれて、『こりやしまつた』と思つたこともあつた。漢楚軍談や三國誌や西遊記などの話をする、毎晩のやうに前晩の續き

をせがまれた。お常婆やの話や、木乃伊や、半造のことを話したら、『そんな薄氣味の悪いお話はもう止して頂戴』と云つた。その癖その後時々思ひ出したやうに、それに關連した細かいことを尋ねた。綾子さんのことも紹介してやつた。その翌る日から、女中と二人で僕のことを、『綾子さん』と呼ぶやうになつた。學校から歸つて來ると、『綾子さんお歸りなさい』なんて云つた。

こんな具合で、今も綾子さんから手紙が來て居ますよ、と笑ひ乍ら云つたのである。僕はその手紙を受取つて、おばさんの居る前で封を切つて讀んで見た。

色々なことが書いてあつた。東京はいやな處だとか、今は虎の門女學



校に通つて居るとか、叔父さんも叔母さんも親切にして呉れるとか、信子さんもいゝ人だとか——信子といふのは叔父の娘で僕の従妹である——そんな事をだら／＼と書いた末に、早く中學校を卒業して、東京に出ておいでなさい。さうしたら二人で何處かに家を借りるか部屋を借りて、自炊生活をしませう。東京に居るのはいやですが、兄さんの上京するのを樂しみに、そればかり待つて居ます。といふことが書いてあつた。

此の『東京に居るのはいやですが』といふ文字が、僕の胸を衝いた。そして、忽ちあの叔父のことが思ひ出された。それから、僕の上京を樂しみに待つて居るといふことが、言ひ知れぬ悶えを抱かした。僕はとても上京して此上勉強するだけの餘裕が、僕の家にあるとは思はれな

つたからである。次に、綾子さんは自炊生活をするといふことを書いてある。彼女が自炊生活をしてまでも、僕と同居して叔父の家を出やうとするには、必らず其處に曰くがなければならぬ。これは僕にも思ひ當る節があつたから、思はず唇を咬んだ。

青年の血は燃える。青年の氣は昂る。青年の心は悶える。野心あるが故に勇むと雖も、思ふまゝにならざるが故に煩悶する。戀知り初めての後は、更に一つの憂苦を加へるのである。思慮もなく分別もなく猛進する處に青年の意氣の頼母しさがあるが、經驗の足らざるが故に下らぬ煩悶憂苦を懷くは悲しむべきである。されどこれ皆人生の一經路である。煩悶もせよ。憂苦も舐めよ。猛進もせよ。失敗も經驗せよ。たゞそれ不



撓たうの精神せいしんが一貫くわんして居ゐるならば、必かならず最後さいごの勝利しょうりを得うる。——併しかしこ  
れは他人たにんに向むかつて云いふ理屈りくつに過すぎない。僕ぼくは遂つひに煩悶はんもんの兒ことなつた。

六〇

九

その頃ころから勉強べんきやうが手に付つかなくなつて、學校がくかうを卒業そつげふする頃ころなどは、成績せいせいが甚はなはだ宜よろしくなかつた。然しかし兎とに角無事かくまじに學校がくかうを卒業そつげふして、故郷こきやうに歸かへることになつた。明日あす歸かへるといふ前夜ぜんや、お別わかれだからといふので、おばさんと芝居しばゐを見みに行いつた。けれどもその記憶きおくは少しも遺のこつて居ゐない。たゞ次のやうなことが、終生しうせい忘わすれることの出來でない印象いんしやうとなつて遺のこつて居ゐる。その夜よは非常ひじやうに寒さむい晩ばんであつた。家うちに歸かへつたのは十二時じふにじ近くであつた。

が、親切しんせつな女中ぢやうちゆうは未まだ起おきて居ゐて、火ひを澤山たくさん起おこし湯ゆを沸わかかして居ゐて呉くれた。おばさんが釀つつた甘酒あまざけを暖あためて飲のんで、奥おくの八疊やとよに三人枕さんにんまくらを竝ならべて寢ねた。寢ねてからも色々いろくな話はなしをして、三時頃さんじころまでも眠ねらずに居ゐたが、何時いづの間まにか皆疲みなつかれて眠ねりに落おちた。

うつら／＼眠ねつたと思おもふと、僕ぼくは何物なにものにか横腹よこはらを蹴けられて、きやつと叫こゑんで飛とび上あつた。おばさんも女中ぢやうちゆうも屹驚びつりして起お上あり、『延田のぶたさん、どう遊あそばして——』と縋すがり寄よつた。僕ぼくは何も言いはずに、たゞ眼めをギョロギョロさせて居ゐた。すると室むろの隅すみの方が急きよに暗くらくなつて、その中なかからお常つね婆ばあやの大きな首くびが——あの恐おそろしい白しろい齒はが——ニユウツと現あはれた。僕ぼくはまたキヤツと叫こゑんで俯伏うつぶした。おばさんと女中ぢやうちゆうとは、僕ぼくに縋すがり付つい



て何か連りに呼んで居たけれど耳に入らなかつた。俯伏して居ると、また横腹をグツと蹴る者があつた。起き上ると又あのお常婆やの首が出て来て、ニタ／＼と笑つた。僕はまた俯伏して了つた。

恐ろしい夜は斯うして明けた。おばさんも女中もとう／＼一睡もしなかつた。僕の身體は一夜にして疲れ果て、眼は落ち凹み、顔色は蒼白くなつて、見たばかりでも物凄い形相になつた。そして、その日から病人となつて床に就いた。

醫者が二三人代る／＼やつて来たけれど、病因が解らぬと云つた。僕自身でも自分が病人であるとは思はれなかつた。たゞ夜中になると、あ

のお常婆やの亡靈に悩まされるのが苦しくもあり恐ろしくもあつた。けれども此事は決して口外しなかつた。何故なれば、この亡靈は僕にはかり見えるのであつたからである。

斯の如くにして、僕は外目には狂人のやうになつて、醫者も終には精神に異状があるのだといふ診断で、僕を精神病者にして了つた。しかし僕自身では決して精神病者ではないといふ、確かな自覺を持つて居た。身體は毎日に衰へて行つた。食欲は一日一日に減じた。おばさんと女中とは、それは／＼親切に看病して呉れた。國から父と富塚のおぢさんがやつて来て、國に連れて歸るか病院に入れるかしなければならぬと言つたけれど、おばさんはこれを承知しないで、妾しに看病さして下さいと



言つた。

日中の僕は元氣であつた。身體は瘦せ衰へても、口だけは達者で、大いにシヤベクツた。しかし、此時からお常婆やのことや、半造のことを口にしなくなつて了つた。そして、たゞ時々思ひ出したやうに、あの大火事のことを話した。

綾子さんのことは決して忘れなかつた。けれども、手紙を書くだけの勇氣が出なかつたので、僕が口述してそれをおばさんに書いて貰つて送つてやつた。病氣のことを言つてやつたら、綾子さんからは毎日のやうに、今日はどうか、氣分はどうか、なぞいふ見舞の手紙が來た。バナ、などを小包で送つて寄こして呉れたことも覚えてゐる。

病臥してから四十日ばかり經つと、亡靈が現はれなくなつた。亡靈が出て來なくなると、病勢は急に衰へて、ぐんぐん全快に近づいた。

六十五日目に床を上げて、はじめて一人でお湯に入つて、身體を淨めた。それから十日ばかりぶらぐして元氣を養ひ、卒業後殆んど三ヶ月を經て、はじめて故郷に錦を飾つて歸ることになつた。錦を着て故郷に歸るといふ言葉は美しいが、本人たる僕は少しも嬉しくも樂しくもなかつた。僕は依然として煩悶の奴となつて居たからである。

恐ろしき亡靈に惱まされてからは、この不可思議なる惡魔の作用に對しても、言ふに言はれぬ恐怖心と懷疑心とを懷かざるを得なかつた。幽靈はこの世に居るものでないといふ人がある。お怪なんか出るものでな



いとも云ふ。然し乍ら、この自ら恐れ悩む處の幻覺を否定することは出来ない。幽霊は居ないかも知れぬが、僕が見たお常婆やの首は、確かに僕を悩ましたといふことは事實である。この事實を、あり得べからざる事として、否定することは出来ない。

お常婆やの記憶が存する限り、僕のこの恐怖の経験は亡び去るものではない。恐ろしき怪談幽霊談の記憶が存する限り、亡霊怪事の出現は否定することが出来るものでない。幽霊や怪物の存在は否定することが出来ても、この人間の幻覺や迷想や忘想や恐怖心を否定することは出来ないのである。

東京に出て勉強することなどは出来まいと思つて居た僕は、綾子さんのお父うさんから學資を貰つて、専門學校に入ることになつた。この時は天にも上るやうな嬉しさであつた。その時ばかりは一時あの胸の悶えを忘れて狂喜した。

つくづく考へて見ると、青年の煩悶なんて云ふものは、下らぬ擱まへ處もなき小問題を、大事件の如くに思惟して、自分で自分の首を絞め乍ら苦しんで居るやうなものだ。何でもないことを苦に病んで、我は煩悶の子で御座るの、我には大なる不平があるのと、自分で自分の馬鹿をさ



らけ出して居る。それで居て御當人は頗る眞面目で眞剣で一生懸命である。竊に掛つた狐がそれから脱れやうと焦慮ると焦慮る程苦しまねばならぬやうに、幻影夢想を逐うて苦しんで居る。僕は實際それであつた。この苦しみは上京といふ言葉一つで治癒して了つたかのやうにキヨロンとした。併し、實を云ふと、これは未だく一時のことであつて、あの恐ろしい謎が胸の奥に横はつて居つて、僕は何時かはこの謎の爲に再び苦しまねばならぬ危険な運命に置かれてあつた。

兎に角僕は大意で上京した。豫報してやつた時間よりも早く新橋に着いたので、誰も迎へには来て居て呉れず、これには大いに閉口した。そして心の中では三時間や四時間位前から、迎へに来て居て呉れたつて

よきさうなものだと、飛んでもない我儘根性を出して、綾子さんの来て呉れなかつたことを恨んだ。致し方がないから高い車賃を拂つて、叔父の家迄駆けつけた。玄關に立つて『御免なさい』といふと綺麗な女の子が出て来た。それは信子であつた。小さい時に逢つた切りではあるが、ちやんと僕を知つて居た。

『あら、光雄さん——お母さま、光雄さんが——』  
と大きな聲を出しやがつた。

『え、光雄さん——』  
と云ひ乍ら叔母が出て来た。

『まあ、早かつたわねい。——今これから迎へに行かうと思つて、仕度



をして居た處よ、まあお上り——』

『綾子さんは——』

僕は先づ何よりもこれを聴かねばならなかつた。

『綾子さんはね、學校から直ぐ停車場の方へ行くと言つてたわ』  
信子は傍から斯う言つた。

『すると信さんは學校に行かなかつたの』

『いゝえ、妾の方は今日先生がお休みになつたので、一時間早く退けたの、それで今歸つて來たばかりよ』

斯んな話をし乍ら座敷に通つた。

『まあ、大きくなつたねい』

叔母は僕の身體を頭为天頂から足の爪先まで見乍ら斯う言つた。僕の心はそんな處の沙汰じやない。綾子さんが氣になつてならないのだ。

『綾子さんは停車場に行つたでせうね』

『え屹度行つてるわ』

『そりや困つたね、僕が迎へに行つて來よう』

『いゝわよ、態々行かなくつたつて、時間に来なければ歸つて來るわ』

『だつて、そりやいけない』

僕は眞面目に斯う言つた。すると流石は年を食つてゐるだけに、叔母の方が氣が利いてゐる。

『それじゃ、あの繁を迎へにやりませう』



と云つて、女中の繁を使ひにやつた。

叔母はまづ國許の様子を、一々訊問した。まるで交番の巡査に宿所姓名を訊されるやうな気がして、いやであつた。

『學校はどうしたの？』

叔母はいよ／＼こゝまで訊問を進めて來た。彼女は僕の成績が平常可成り善かつたものだから、その善い成績を僕の口から聞きたいものらしかつた。

『尻から二番目でした』

僕は簡單明瞭に答へてやつた。

『嘘よ』

信子は忽ち否定した。

『僕は嘘が大嫌ひです』

叔母はたゞ笑つて居た。

信子はいゝ女であつた。容貌もよし氣立もよし、叔母に似た優和しい女であつた。これなら綾子さんの友として立派なもんだと胸の中で品評をやつた。若し信子に叔父の性格の一片だに見えたならば、僕は恐らく綾子さんの爲に、直ちに別居を主張したかも知れぬ。

『叔父さんは？』

話の種が見付からぬので、口にも出したくない「叔父」といふ言葉を以て、信子に斯う聞いた。



『大阪の方へ行て居るの——』

『さう』

僕は腹の中で「先づよかつた」と思つた。

色々な話をして居る處に、綾子さんが歸つて來た。

一一

暫らく見ぬ間に、綾子さんはぐつと大きくなつて、見違へるばかり美人になつて居た。信子も美人であるが、綾子さんの方が遙かに優れて居るらしく思はれた。これ或は鼻眉目かも知れない。知れないけれど僕にさへ美しく見えれば、僕はそれで満足である。

逢はぬ内こそ話は山々あるが、逢つて見ると格別話はないものであつた。それでも綾子さんの方には大分話の材料があつた。少くとも綾子さんの方から緒口を切つて、僕をして應答せしむるだけの餘裕があつた。先づ第一に聞かれたことは、あの病氣の一件であつた。僕は之に對して『精神病だと云つて居ました』と答へて、直ぐ叔母の方に顔を向けて、『僕は氣狂ひなんださうですよ。用心しなければいけません』と言つてやつた。

『まあ、いや』

信子が笑ひ乍ら言つた。

『事によると、また悪魔がやつて來て、僕をして信さんをお食ひ殺させる



『かも知れません』  
僕にも似合はぬことが口から出て来た。

話はこんな下らぬことの間に進んで、夜は更け、日は移り、何時の間にか僕も東京の生活に慣れて、そろ／＼ヤンチャンも出て来た。僕がヤンチャンをやればやる程、家の中が賑はつていゝと、叔母は連りに喜んで居た。

叔母は非常に親切にして呉れた。信子も勿論さうであつた。時々旅から歸つて来る叔父も、その性格に似合ず僕に對しては馬鹿に親切で、何から何までよく世話をして呉れた。併し叔父が親切にして呉れれば呉れる程、僕は叔父が厭らしくてならなかつた。寧ろ邪慳にされて虐待され

た方がいゝと思つた。即ち、その天賦の性質をそのまま發揮して貰ひ度かつた。

兎まれ角まれ、僕の東京生活は愈々希望に富んで来た。入京以來二三ヶ月はぶら／＼遊んで、綾子さんや信子の案内で諸處方々を見物し歩いたが、思へばその當時の僕は最も楽しい時代であつた。

それから僕は早稲田大學に入つた。一高に入學して大學を卒業すると云ふのが僕の理想であつたけれど、理想は遂に實際の趨り行く處に及ばなかつた。けれども、僕に勉強すると云ふ心のある限り、學校などは何でもよいのである。帝國大學を出ると幅が利きさうであるが、社會はさう馬鹿ではない。學士の巡查も居るではないか。私學から博士も出るで



七六  
はないか。要するに人はその人の實力だ。突進すれば衝突がある。それに勝てば偉くなり、負ければ敗残者となるのだ。何でも人は勝利者となるに限る。負けるのは損だ。損だと知りつゝ負ける者もある。こんな人間は矢張り何時迄たつても成功は覺束ない。

月日の立つのは早いもの、僕の學業も進んだが、綾子さんの方は一層進んで卒業と云ふことになつた。信子も一緒に卒業した。男の方は中學を卒業しても、少つとも權威にならないが、女の方は女學校卒業で大いに權威になる。智慧比べをやつて見ると決して負けはしないのだが、何故か女學校といふものに馬鹿に權威がある。女は割合のいゝもんだ。割合のいゝのではない、男が安呆で助平だからだといふ根本原則を忘れて

居るからだ。ふゝん、人生遂に女の弱きに及ばずか。

綾子さんが卒業すると、綾子さんのお父うさんがやつて來た。そして、早速僕と綾子さんの同居を主張した。僕は何だかキマリが悪かつたから、未だ早いといふ理由で拒絶したが、内心は甘いことになつたわいと思つて居た。それから綾子さんの内意も確かむべく、富塚のをぢさんと二人で一寸話して見た。

綾子さんは一體何んと云ふかと思つて、その口上を心配して居ると、女は一旦の事に當ると、男よりも大膽なものを見せて、どうしても一緒になると言ひ出した。こゝで僕は大に色男の面目を施したわけであつて、内心ほく／＼して居た。叔母も勿論大悦びで早速家を探すことになつた。



僕は學校に通つて居たから、家を捜しには行かなかつたけれど、富塚のをぢさんと綾子さんと信子と三人で、四五日はかり歩き廻つて、内幸町にいゝ住居を見付けてそこに約束をして來たと云つた。

新世帯が立派に出來上つて見ると、餘り悪い氣持はしなかつたが、何だかキマリが悪いやうな氣もした。殊に信子の顔を見ると、恥かしくてならなかつた。それでも、綾子さんの方は平氣なもので、信子と何くれとなく話し合つて仲よくして居た。

## 一一一

僕は氣が短いから、くだぐしいことを説明してゐる根氣を持たぬ。

また、斯う言つたら面白からう、斯う書いたら感心するだらうなんて云ふ、氣取つた心なども毛頭ない。それから、これから何を言はう、如何なる順序で陳べやうなぞといふ、殊勝な順序立なんかを考へる氣もない。であるから、思ひ出づるがまゝ、案じ出すがまゝ、口から出放題、筆の走るがまゝに、ぐんぐん事件を書き叙べて行く。こゝが大切の處だから委しく書くの、こゝが下らぬことだから略するのといふことなしに、何でも筆に任せて書く。

僕は斯の如くにして、多年の望を遂げて——別に多年の望みであるわけでもないが、兎に角少年時のあどけない交りから、今日に至るまで二十年間辛抱し來つたその甲斐あつて、綾子さんと夫婦といふものになつ



て、同じ床に起き臥しするやうになつた。

夫といふものになつた僕は、依然として腕白な、やんちやんな氣を失はず、無邪氣で無鐵砲で構はず屋であつたが、妻といふものになつた綾子さんの人物は、まるで、變じてしまつた。第一に大人じみてしまつた。世帯じみてしまつた。昔の無邪氣はなきにしもあらずであるが、何處かに引き締つた大人ぶる處がほの見えるやうになつた。そして、僕に對する様子身振りも、昔のそれと餘程違つて、何から何まで世話を焼かねば、妻たる責務がつとまらぬものゝ如く考へて居るらしく見えた。斯うなつて來ると、僕の方が弟で綾子さんの方が姉であるらしく、姉が弟を世話するやうなものであつた。何と云つても僕の方が坊ちやんで、夫たる資

格には甚だ缺けて居るやうであつた。

僕が坊ちやんであるだけ、綾子さんは大人ぶらねばならなかつたのかも知れない。隣り近所の附き合ひといふものがあるさうだけれど、僕はそれを知らなかつた。しかし、綾子さんはそれをうまくやつて呉れたものと見えて、何だか近所の評判はよさうであつた。

僕は綾子さんと一緒になつてからも、相變らず『綾子さん』と呼んで居た。綾子さんはそれが可笑しいからお止しなさい、と云つたが、その時は、『うむ、今度から改正しやう』と云つても、直ぐ忘れて了つて、『綾子さん』とやつて笑はれた。夫といふものになると、自分の妻の名に、最も親しみのある、またやさしみのある、『さん』といふ二文字を、妻の



名に附けて呼ぶことが出来ないものかと思つて、僕は何だか悲しいやうな氣がしてならなかつた。若し斯の如くんば、夫たらず妻たらずして、昔の仲をそのまゝに、『綾子さん』と呼び、『兄さん』と云はれたく思つた。夫婦になつてから、綾子さんは、僕を『兄さん』と云はなくなつた。その代り、『あなた』といふやうになつた。『あなた』といふ言葉はけしからぬ言葉で、この一語が僕をして全く大人らしくして了つた。この腕白の坊ちゃん光雄を、旦那らしくしてしまつた。

信子は三日に一度位は屹度遊びに来た。そして二晩位宿つて歸ることも、月に二度や三度位はあつた。どうしたものか、僕等三人は馬鹿に氣が合つて、馬鹿に親しみがあつた。又、馬鹿に仲がよかつた。

時々、僕が信子を捉まへて、夫婦といふものについて説明をして、談會々佳境に入り来るや、綾子さんは、

『もう大抵にしてお止しなさいよ』

と云つて説明停止を命じた。すると信子も、

『もう澤山——妾しもうわかつてよ』

なんて、解りもしないことを解つたなんて云つた。若し、信子さんがこれを解つて居たとすれば、それこそ由々しき貞操問題である。そこで、僕がこれに一本突き込むと、

『まあ、いやな人、そんなことが——』

『いやな人の許になぜさう毎日のやうに遊びに来るんだ。つまる處、こ



の事を研究し度い爲に来るんだらう。それだから僕が教授して上げるんだ』

こんな馬鹿氣きつた事をぐちやぐち喋舌つて笑つてばかり居たのも、長い時日ではなかつた。

夫婦住居の一年は夢の如くに過ぎ去つた。暑さ寒さの無駄小言も、笑ひさゞめく和合の二人の仲の歡樂の一つであつた。憂ひもなく悶えもなく、苦しみもなく悩みもなく、たゞそれ花園に狂ふ胡蝶の夢を辿り來つた僕は、家の貧も忘れ、お常婆やの昔も忘れ、天上天下たゞ歡樂の安きを悦んで居た。學業も昔の秀才たる僕に歸つて、人に劣らず立派な成績を取つて居た。然るに、槿花の榮えは長くはない。天人も亦五衰の日に

會ふとかで、僕は再び悲愁の淵に沈湎する身となつた。

それは、綾子さんが、不治の大患に罹つたことである。

## 一三三

綾子さんの病氣に就いては、多くを書き度くない。——いや、書き度いのは山々であるが、書かうとして筆を把ると、この胸が一杯になつてもう何も書けないのだ、

綾子さんは病院に入つた。五十餘日、出来るだけの療治をして貰つたが、滅び行く天の命は人力の如何ともすることが出来ないことであつた。入院してから五十六日目、これが綾子さんの終焉の日であつた。その



日は雨がしとくと降つて居た。もう夕方であつたらう、綾子さんは側に就いて居た僕の手を、痩せ衰へた細い手で握り、そと口の邊に持つて行つて軽く接吻した。その眼には涙が一杯になつて居た。

何か云ひたげに口を動かしたが、もう聲は出て來なかつた。僕はもう耐らなくつて、綾子さんの頸に抱きついた。

綾子さんは死んだ。僕の手を固く握つたまゝ、ニツコリ笑つて、安らかに永しへの眠りについた。それは雨の降る火ともし頃であつた。

死に行く人一語も發せず、これを見護る人片言も言はず、静寂の中に乾坤無限の大生命は、空漠の内に還り去つたのである。たゞ生き遣れる人のすゝり泣く聲と、遠くかすかに聞こゆる暮鐘の音とが、哀愁無限の

涙を誘ひ出した。

死せる冷たき頬に接吻して、白布を以てこれを覆ひ、臥床のまゝ屍體室に運んだ時、この胸の血潮の運行が止まつて、全身の神経が麻痺したやうに、僕は屍體室の眞中に倒れた。

もう何も言ふまい。これ以上何も言ひ得ない。これだけ記す僕の努力は竝大抵のことではないのである。事實、僕はこれだけのことを書くのに、幾杯となく酒を傾けたのである。この筆は盡り、この文は拙く、この叙事は下手であるけれど、少くとも僕は苦しい思ひを忍んでこれだけのことを書いたといふ、この心を察して貰ひたいのである。僕輩、延田光雄の願ひはたゞこれである。



綾子さんは死んだ。なぜ死んだのか。なぜ僕を遺して死んだのか。死んで了つた綾子さんは、それで永劫の安眠が得られやうが、後に遺つたこの僕はどうすればよいのか。あの新世帯の歡びは何處に去つたか。あの内幸町の樂しき生活は夢か。たゞ一年の夢だ。要するにたゞ一年の榮華に過ぎない。僕の希望の光であり、僕の生命の泉源であつた綾子さんは、僕を遺して僕より先に死んで了つた。何事の無常ぞ。何事の運命ぞ。愚痴と悔恨とは、常に同じ繰り事を再々するに過ぎない。もう愚痴も云ふまい。悔恨も云ふまい。歎きもしまい。泣きもしまい。あゝ然し、愛あればこそ愚痴も出る。涙も出る。泣きもしたくなる。

僕の愚痴、悔恨、怨語、繰言、回顧、追想、涕淚、これ等は皆これ、

逝ける綾子さんに對する、哀愁無限の弔辭なのだ。哀惜極まつて怨恨となり、悲哀極まつて愚痴となる。僕を知る綾子さんは、よくこの弔辭を響けて呉れるだらうと思ふ。

## 一四

綾子さんに死に別れた僕は、内幸町の家を疊んで、また叔父の家に起臥する身となつた。此頃の僕は、再び彼の煩悶苦惱の間に生を托して居つた。信子の親切な慰めも、叔母の柔和しいもてなしも、僕にとりては遂に何の慰樂も與へなかつた。再び勉強は手に附かなくなつた。日常生活は自暴半分のふしだらなものとなつた。酒も飲んだ。併し、ついぞ一



度も女といふものに觸れたことはなかつた。女中の手を握ることすらも、綾子さんに對して大なる罪悪であるのかのやうに思はれて、これを怖れた。僕はたゞ暴飲し、たゞ放吟するばかりであつた。此の意味に於て、僕は貞操正しき男であつた。而して、此時に於て、僕は一の定義を發見した。貞操といふものは愛人に對するものである。と。僕は綾子さんであるが爲に、この貞操が保持された。綾子さんが死んでからも、なほその愛は僕をして邪淫の徒とならしめなかつた。肉體的にも精神的にも、僕の貞操は固守された。

苦悶の一ヶ月は過ぎた。或日のこと名も知らぬ一人の男が僕を訪ねて來た。兎に角、室に通して見ると、それは綾子さんの入つた病院の下足

番の男であつた。何の用事かと思つて居ると、

『あなたは、延田光雄さんですか』

『え、さうです』

僕は丁寧と言つた。

『すると辰井の延田さんでせうね』

『さうですよ。何うしてゝすか——』

『えつ、さうすると、矢張りあの坊ちゃんでしたか——まあ大きくなりましたね』

男の聲は濕んで、僕の方にじり／＼と近寄つて來て、懐かしげに僕の顔を見つめた。これは、僕が殆んど二十年來、慕ひ慕つて居たあの半造



であつた。僕はもう半造の顔を忘れて居たのであつた。

『するとお前は、あの半造かね』

『はい、さうです半造です、馬鹿者の半造です。坊ちゃん御免下さい』

男は何の爲かめそく泣き出した。僕は何と言つてよいか判らぬので、たゞ黙つて居ると、

『實は病院で度々御見かけ申しましたが、餘りよく似たお顔なので、不思議に思ひ乍ら看護婦さんから訊いて見ますと、お名前までが同じなので、若しやと思つて懐かしい餘りお伺ひして見たので御座います』

半造の聲は兎角漣つて、思ふまゝに言ひ得ない。僕も嬉しいやら懐かしいやら、今の胸の苦痛などは忘れて、たゞ變り果てた半造の様子をま

じく／＼と見て居た。

じつとして半造を見て居ると、初めは嬉しい喜ばしいとは思つたが、思ひは昔のことに走つて行つて、木乃伊、泥棒、火事、お常婆やなどの回想が、次々に胸に浮んで來るので、我知らず身慄えた。そして、眼前に居る半造が、何だか僕を苦しめに來た悪魔のやうに思はれて、恐ろしくつてならなかつた。彼の僕に對する態度は、昔そのままに、如何にもやさしく、親切で、誠心をこめて居るが、僕の無邪氣なりし心の乾板に影つた記憶は、どうしても消え去らずして、半造のその眞面目な態度を、そのままに受け付けることが出來ないのであつた。先入は大なる權威である。僕の無垢なる心は、一旦の事よりして、不滅の記憶に穢



されて、怨恨と恐怖とが、要らざる不安と、猜疑心と、恐怖とを胸に宿すに至つた。この忌むべき記憶も、綾子さんの居る間は、その愛と微笑とによりて打ち消されて居たが、綾子さんの死は、あらゆる歡樂と慰安とを奪ひ去つて、煩悶と苦痛と怨恨と恐怖と悲憤と猜疑と不安とを、十倍にも百倍にもして僕の上に覆ひ被せて來た。而して、今半造が僕の前に顯はれたのは、悪魔が來つて僕の懊惱を糺弾するのであるかの如く思はれた。然もその糺弾は懊惱排除の爲めにあらずして、懊惱の足らざるかを疑つて、これを倍加せしめんが爲であるかの如く考へられた。僕は耐らなくなつて、

『半造、今日は少し大切な用事があつて、外に出なければならぬから、

失敬だがまた出直して來て呉れ』

と言つた。半造は僕の言の餘り突然なのに驚ろいた様子であつたが、

『はい、また伺ひます。それに色々お話ししたいことも、お詫びしなければならぬことも、お知りを願つて置かねばならぬことも、色々申上げることもありますから、何時かゆるくお伺ひします。今日はたゞ若しやと思つて、それを確かめる爲にお伺ひしたのです』  
と言つて、丁寧に禮をして歸つて行つた。

半造が歸らうとして玄關に降り立つた時、丁度外から歸つて來た叔父と玄關口で顔付き合した。其瞬間、叔父の顔色は土の如く變つて、何も言はずに急いで家の中に入り込んだ。叔父の姿を見た半造の眼は、異様



に輝き渡つて、家に逃げるやうに隠れ込んだ叔父の後姿を睨んで、グツと食ひ縛つた唇は噛み切れさうであつた。而して嚇つと怒氣を示して額には青筋が波立つた。この物凄半造の面相を見た時、僕の兩腋下には冷汗がゾツと流れた。叔母はと見ると眞蒼になつて唇の色まで變へて居た。併し、信子はそれに氣付かないらしかつた。

半造が歸つてから、叔母は此事を叔父に話すと、叔父は白ばくれて、

『一體、あれは何者かい』

と言つた。そして、叔母が何と言つて尋ねても、何のかんのと曖昧なことを言つて、吳魔化して居た。そして、それから一時間も経たぬに、叔父は突然用事があるから大阪に行くと言つて、叔母が何と言ふのも聞き

入れず、アタフタ旅立つた。

## 一五

運命は小説以上の奇蹟を演出する。僕は斯くして多年心にかけて居た半造と再會した。偶然に然も特に拵へたやうに、不思議な再會をした。會はぬ間は慕はしかつたが、會つて見ると恐ろしくてならなかつた。あの牢屋で見た半造の面影が、最もなつかしく親しむべきものであつた。が今はその面影も失せて、何となく憔悴した、敗残者の半造を見ては、自分の敗残を忘れて同情の涙も流れ出るのであつた。恐怖心と同情心とは同時に起り得るものであるといふことは、此時にはじめて知つた。憎



む心と愛する心とも同一であるに相違ない。

半造に會つたその日は、一床を伸べて寢て考へた。考へは輪形の軌道を走るが如く、同じ處から始まつて同じ處に歸つて來るばかりで、遂にその道を脱出して新らしき考へを生み出すことは出来なかつた。回想は同じ回想を幾回となくせしめた。煩悶は同じ煩悶を繰返さしめた。人間の煩悶苦痛は、要するに形なく實體なくつまらぬことを、自ら困しみ悩むだけのことであつて、一旦この煩悶と苦痛から免れると、「何のこつたい」と云ひたくなるに過ぎないのである。然もなほこれに悶えこれに苦しむ吾々の淺はかなことは、情けないことゝ言はねばならぬ。

兎に角、僕は一人で困しみ一人で悶えた。その夜は枕元に酒を運んで貰つて、叔母と信子を對手に盛んに飲んだ。叔母と信子とは非常に心配して、これを止めたけれど僕は肯かずして飲んだ。餘り飲み過してその夜は遂に一睡も出来ぬ程、酔ひに苦しんでしまつた。叔母と信子は附切りで看病して呉れた。

その翌る日は、前夜の疲れで病人の如く蒼くなつて、一食も採らずに臥せつて居た。晝頃になつて氣が少し變になつたと思つたら、またあの亡靈を見た。亡靈が消えたと思ふと、今度はあの火事を見た。

『火事だ、火事だ、大變だつ』

僕は夢中で怒鳴つた。

間もなく火事は塌んだ。次にはあの泥棒がやつて來た。



『畜生、泥棒奴、何をするんだいつ、馬鹿つ、泥棒』

狂人の如く怒鳴る此聲は、隣り近所にまでも聞こえたさうだ。

次には綾子さんの病床の夢だ、僕はたゞ泣いた。

斯して夜に至つても、これ等のものが交る交る身に迫つて来て、怒鳴り、叫び、泣き、笑ひ、僕は全く發狂者の如くになつて了つた。叔母は早速醫者を呼んで診て貰つたら、醫者は精神に異状を來したのだと明瞭に言つた。僕はこれを聽いて、

『馬鹿つ、精神に異状があるか。酒と心配が怖ろしい夢を見せるのだ。』と言つたが、醫者はこれも精神の異状が言はしめるのだとした。然り心に異状が無くして、こんなことがあるものか。この位のことには醫者を煩

はさずともわかり切つて居る。

酒氣が全くなくなると、僕の精神の異状はなくなつてしまつた。然し依然として、心の悶えは存して居た。

『叔母さん、僕はもう駄目ですね、とても駄目です』

何とも付かず斯う話しかけると、  
『何故です、そんなことがあるもんですか。あなたは此頃どうかしてゐますよ。男らしくもない。』

この「男らしくもない」といふ一言が、異様に僕の耳に響いた。

『男らしくないかも知れませんが、實際氣がどうかしてしまつて、何も手に附かないんです。』



『そんなに、綾子さんの事ばかりくよくよく考へて居たつて、今更仕方がないじゃありませんか。男らしくすつぱり断念めて、しつかり勉強なさいよ。外に女は澤山あるじゃありませんか』

然り、外に女は澤山ある。然し、僕には綾子さんの外に女はないのだ。

『綾子のことばかりで心配して居るんじやありません。未だ外にもあるんです。といふのは、あの半造のことが——』

と、遂に何の氣なしに言つたが、いやこれは飛んでもないことを口走つて了つたと思つた。

『何ですつて、半造のことつて何です』

『まあ、それは訊かないで下さい。何れよくわかりますから。——それ

よりか、男らしくさつぱりして、笑つて暮しませうよ』

僕はしどろに斯う言つてお茶を濁した。

## 一六

男の貞操はあてにならぬ。僕の貞操は破れて了つた。二十餘年堅固鐵壁の如くであつた貞操が、一夜の出來心から破壊されてしまつた。對手は親切的な従妹の信子である。

僕より碎けたか、彼女より折れたか、その何れなるかを言ふ必要はない。僕の病的精神状態が治癒て、元の健康體に復してから間もないことであつた。健康體に復したと云つても、綾子さんのことを忘れ得ぬ心は、



舊の如き快活無邪氣を振ふことが出来ずして、兎角物思ひに沈み勝ちであつた。その夜も自分の部屋に閉ぢ籠つて、机の上には本を播げてあつたが、心は何時か死んだ人の上には走つて、ぼんやり物を考へて居ると、其處に信子が入つて來た。

『あら、又、考へ事をして居らつしやるのね』

『うむ——』

僕はたゞ斯う言つて、信子の艶な姿を軽く見やつた。彼女は持つて來たお茶を、僕の机の上に置いて、自分は机の側に坐つた。

『叔母さんは？』

『お裁縫よ』

『叔父さんは未だ歸つて來ないの？』

『來月の末に歸ると云つて來てよ。——光雄さん、家のお父うさんは

此頃何うしてあゝ外にばかり出るのでせう』

彼女は考へるやうに——又心配さうに言つた。

『それは元からじやないか。用事があれば致し方がない』

僕は投げるやうに言つた。

『でも、別にそんなに用事がありさうじやないじやありませんか。此頃は何故かお母さんも連りに心配して居てよ』

『此頃になつて心配するの？』

『え』



『もう遅い、叔父さんの馬鹿は昔からだ』  
 僕はムキ出しに斯う言ひ切つてしまつた。信子はサツと顔色を變へ、眼を大きく睜つて、

『えゝ、そりや——そりや何うしたとお言ひなの——』

信子は膝を進めて、僕に磨り寄つた。

『まあいゝ、何時か判ることなんだ』

『そんな事を言はずに——』

『いや言はない。言へば角が立つ。一寸口を迂らしてしまつたが、もうこれ以上に言はない。僕が居るうちは大丈夫だ』

信子には僕の言ふことが、判り兼ねる様子であつた。勿論判る筈がない。

突然として斯様な話が出たんだもの、氣になるのも無理がない。信子はしきりに僕にその事實を話せと迫つたけれど、僕は斷乎としてこれを拒絶した。

二人は暫らく沈黙した。信子は蒼い顔をして下俯向いて考へ込んで居た。

『此頃は全くつまらない』

『全くよ。お父うさんのことが心配になるのに、光雄さん迄が沈んで居らつしやつて、家中が陰氣で仕様がないわ、それに、此頃は何うしたものか、お母さんが毎日泣いてばかり居らつしやるんだもの——』  
 『ナニ、叔母さんが泣いてる。——さうだ、泣く筈だ——』



僕は又無頓着に斷言した。信子の顔色はまた變つた。

「光雄さん——あなた何もかも知つてゐるやうね」

「うむ、知つてる」

僕は三度び薄氣味の悪い斷言を、ブツキラボウにやつた。知つて居るとは言つたものゝ、半造と叔父との關係は知らなかつた。信子は僕の此の答へを聴くと、確かと僕の手を握つて、

「光雄さん、御性だからそれを明して頂戴」

「いや——」

斯う言つて、僕は信子の手を固く握り返して、信子の體を自分の膝の上に引き付けた。信子は僕の膝の上に顔を押し付けて、シクシク泣いて居

た。二人は斯うして暫らく無言で居たが、僕の心は言ひ難い、——表現し難い或る力に支配されて、綾子さんを思ふ心も、半造の心配も、日頃の陰鬱も、何處にか影を潜め去つたことを自覺した。

「信子、お前は初めて心配といふことを知つたのだ。僕が綾子を失つて氣が沈んだのも、お前がお父うさんのことを心配して泣くのと、殆んど同じやうなものだ。同情するよ」

「光雄さん、御性だから打明けて頂戴——」

「言はなければ言はぬで心配するだらうが、言へば猶更心配する。』  
是以上のことはもう書く必要はない。二人はたゞ相抱き合つて泣いた。泣いたけれども、その泣いて居る心の奥底には、悲しみも、心配も、道



徳も、義理も、體裁も、すべてのものを超越して生動する力が活動して居た。この力が何時の間にか二人の胸と胸とを貫いて居た。

實に此時である。その夜である、僕は殆んど無意識に、咲き誇る花を手折つた。手折られたその花は、その日その時から、その全生命を僕に托して了つた。手折つた僕は、自ら顧みて羞恥の感に堪へず、淪落のどん底に墮し去つたやうな氣がして、我と我が煩悶を更に倍加した。

綾子さんに對する貞操は、その日全く潰裂して去つた。

## 一七

叔父は以前から外出勝ちで、殆んど家に居るやうなことは無かつたが、

此頃に至つてそれが殊に甚だしくなり、従來のやうに何時歸つて來ると豫報することもなく、唐突けにヒヨツクラ歸つて來て見たり、又、何處に行くと云ふ行先も教へずに、フイと家を出たなり十日も二十日も歸つて來なかつたり、様子が全く一變して了つた。その態度は何となく落付かず、そはくして居た。それに氣が短かくなつて事々に腹を立て、は、叔母や信子や僕を叱り飛ばした。斯うなつて見ると、僕の胸には愈々それが點頭かれる節が出て來て、大なる祕密の緒口でも見出したかのやうに嬉しかつた。併し、僕は實際に於て、叔父と半造との關係は全く知らなかつた。けれども半造が來て以來叔父の様子が急に變つたのであるから、其處に何等か祕密があるに相違ないと云ふことは察して居た。彼の



時の半造の面相を見た者は、僕ならずとも大なる疑惑と恐怖心とを抱くに相違ない。

叔父の態度が變ると同時に、叔母の起居も變つて來た。その顔色は日毎に悪くなり、身體は憔悴し、兎角室にはかり閉ぢ籠つて、獨りで泣いてばかり居るやうになつた。そして、信子が外出して家に居なくなると、必らず僕を呼んで、叔父に就いての相談を持ち出しては、僕の知つて居る限りの秘密を問ひ訊さうとした。特にあの半造に就いて細々と尋ねた。併し僕は之に關して語ることを拒絶した。未だ子供の時分から、色々な經驗に會して、秘密といふものを隠しに隠して來た僕は、秘密に就いて口外するとも——他人の裏面を語ることも斷じて好まなかつた。何故か

と云ふに、僕は僅かの秘密にも思ひを走せる毎に、あの恐ろしき悪魔に苦しめられると云ふ、先入の大恐怖心を持つて居たからである。即ち、秘密と云ふものに對しては、全く臆病小心に化し去つて居たのである。故に此の秘密を守ると云ふ點に於ては、僕より確かな人間はあるまいと思ふ。

僕が口を緘むと緘む程叔母はこれを問ひつめ、果ては泣き口説き怒り罵しるやうなことも度々あつた。僕と雖も叔母が斯く心配するからには、知つてゐる限り打ち明けやうと思つて、咽喉の處までその聲が出て來るが、その瞬間に於てあの恐ろしき悪魔が襲ひ來つて、僕の頸をギユツと締るやうな氣がして、急にそれを思ひ止まらざるを得なかつた。



叔父は放埒になる。叔母は憔悴する。僕は沈鬱になる。この間にある信子は、事情もわからず、理由も知らず、たゞ一人で不快な家庭の内に胸を痛め、悲しみ悩んで居るのであつた。思へば可哀さうな女である。かゝる間にも、僕と信子との關係は、日に日に深くなつて行つた。關係は深くなつても、お互の心配と不快と陰鬱とは、之が爲めに少しも軽減せられるやうな事はなく、寧ろ自暴半分に淫らなる關係を續けて行くやうな具合であつた。遂には叔母もこれに注意するやうになつたが、その頃の信子はもう普通の身體ではなかつた。

此處で話しが一轉するが、今日は來まいか、今夜はやつて來まいかと、胸の中で氣を痛めて居た半造は、その後少しも姿を見せなかつた。僕は

半造に會うのは恐しいやうな氣もしたが、會はねばまた會はないで氣になつた。一日でも遅く來て呉れよばいと思ひ乍らも、なぜ姿を見せないのだらうといふ心配もあつた。餘り消息が知れないので、様子を探りがてらあの病院の前迄、わざ／＼行つて見たこともあつた。然し半造の姿は見えなかつた。さうなると、半造に對する疑惑と恐怖心と心配とは愈々加つて來て、叔父の後姿を睨まへたあの面相や、あれやこれやを思ひ合せては、新たなる悶えが生じて來た。

處へ、ふいと半造が訪ねて來た——半年ぶりで——信子は顔色を變へて二階の僕の室に飛んで來て、

「光雄さん、來ましたよ、あの半造が——」



と云ふ聲は慄えて居た。僕も一時屹驚したが、

『上げてくれ』

と静かに言つた。

信子に案内されて僕の室に入つて來た半造の姿を見ると、此前とは宛で違つて居た。此前來たときには半纏姿であつたが、今日は大島の立縞の袴に同じ羽織、下には縮緬の長襦袢を重ねて居た。髪は丸角に綺麗に刈り込んで、顔も剃り立てと見えてつや／＼して居た。昔に變らぬ白い皮膚、ハツキリした凜々しい大きな眼、キリ、ツと締つた唇、どう見ても立派な好男子である。未だ五十には三つ四つ間がある男盛りの年格好、肩身狭まさうに身を縮めて、僕の前に畏こまつて、物も言はずに頭を下

げた様子、これがあの大罪人とは受取れなかつた。それでも、僕の胸には言ひ知れぬ恐怖の心と、疑惑と、而して、なつかしさとがこんがらかつて居た。

『先達は失禮した。それ以來餘り來ないので、どうしたのかと心配して居た處だつた』

事に衝き當る迄は物恐じもするが、一旦會して了ふと存外大膽になつて、僕から先づ口を開いて斯う言つた。

『え、直きお伺ひするつもりでしたけれども——少し都合が悪かつたものですから』

半造は手を揉み乍ら、昔の癖をそのままに、少し顔突き出して肩を輕



く動かし乍ら言つた。彼は僕の顔をちら／＼見たが、僕の眼が彼の眼に視線が合ふと、恐れるやうに周章してそれを外らした。

『十日程前に、一寸病院迄様子を見に行つたがお前は居なかつたね』

『ハイ、さうでしたか、そりやどうも恐れ入ります。矢張り昔のやうにおやさしくして、勿體なう御座ります』

半造の聲は急に濕んで、彼は手巾を取り出して眼を拭いた。彼は僕に對すると、どうして斯う涙脆いのだらう。

一八

二人は暫らく無言で居た。半造はたゞ頭を垂れて黙々として居た。そ

して時々盗むやうに上目を使つて僕の顔を見た。僕は机に片肘ついて、熟つと半造の顔ばかり見て居た。僕の胸の中には色々な思ひがコンガラカツテ居たが、フイとあの火事場の光景が眼に影じた。此時僕は電氣に打たれたやうにグツと起き直つた。半造は屹驚して僕の顔を見た。僕は屹つと半造の顔を睨み返した。すると半造は急に萎れて下に眼を移した。實にその時、僕は母のことを思ひ起したのであつた。而して半造は僕の母を殺したのだなと云ふ心が、蝮のやうに頭を持ち上げて來た。

『半造』

『ハイ』

半造は物怖ぢするやうに僕の顔を見上げた。



『あの火事の時、僕を助けたのはお前だらう』  
半造は直ぐには答へが出来なかつた。

『ねえ、さうだらう』

『はい』

この『はい』と云ふ一語を聞いた時、僕は狂人の如く起き上つた。その時の僕の心には、『復讐』の二字より外に何もものもなかつた。半造は慕はしい、戀しい、懐かしい、大好の男であるが、實にその時に於いては、この親しみ心などは全く消え失せて、たゞ『母の仇』といふ憤怒の心より外には無かつた。

『すると貴様は母を殺したのだな』

『まゝ、坊ちゃん暫らく氣を靜めて下さいまし』

半造は兩膝で立ち上つて、兩手で僕を制した。何故か僕はその時に急に勢ひが碎けて了つた。勢ひが碎けて了ふと、眼の前に居る半造は、矢張り僕の大好きの半造であつた。その半造の顔を見ると、何とはなしにこの心が紊れた。僕は力なく腰を下して机に凭れかゝつた。

『坊ちゃん——』彼は矢張り坊ちゃんと言ふのであつた。『話は長う御座ります。事柄は入り組んで居ります。どうか半造の話を聽いて下さい』半造は落着いて言つた。彼の態度には何處となしに犯し難い所があつた。僕は何となく惹き付られてそれに傾聴せざるを得なかつた。

要するに僕は、半造の眞面目な態度に動かされたのである。人間が一



片の私情なく、眞面目に至誠を以て對して居る時は、何人と雖もこれを犯すことは出来ないのである。

「坊ちゃんがお怒りになるのも無理はありません。然し、どうか話が了る迄は、何んなことがありましても、お腹を立てゝ下さいますな」  
僕はたゞ點頭いて見せた。

此時、障子の外から信子が、

「光雄さん一寸——」

と呼んだ。

「何」

と云ひ乍ら出て行くと、ずつと階段の近くまで呼び寄せた。そこには叔

母も居た。

「今のあの大きな聲は何うしたの？」

叔母は心配さうに斯う訊ねた。

「何でもないです。心配してはいけません」

と云つたが、叔母は安心出来ぬやうに、

「大丈夫なの、何だか胸騒ぎがしていけないのよ」

「え、大丈夫です。何も氣にすることはありません」

「さう、それならいゝですけれど——一體あの男は悪徒じやないの——」

「いゝえ——」

とは云つたが、この推察にはゾツとした。



『まあ、心配せずに居て下さい』

と言つて、室に引き返さうとすると、信子がチヨツと袖を抑へて、小さな聲で、

『あの——お父様が歸つて在らしつてよ』

『え、叔父さんが——あの半造の來て居ることを言つて了つたかえ』

『いゝえ、でも今あなたが大きな聲を出した時、誰が來て居るんだいと言はれたので、一寸マゴついて了つたのよ——それでも半造だとは言はなかつたの——』

『さう、そりや困つたねい、まあ成るべく半造だと言はずに居てくれよ。』

——ねえ、叔母さん、黙つて居て下さいね』

と云つて、僕は室に戻つた。そして、

『半造、今叔父が歸つて來たといふのでね——』

とこれまで云ふと、

『えつ、叔父さんが——』

彼の眼は異様に光つた。この時僕はこりや困つたことを言つて了つたと思つた。彼は僕の困つたやうな様子を見て取つたと見えて、

『坊ちゃん、私と一緒に外に出て下さいませんか。甚だ勿體ないわけですが、此家では少しお話しくいこともありませんから——』

半造と連れ立つて外に出やうとすると、信子が心配さうにそれを止めた。けれども僕は少しも心配することはないと云ふことを言ひ含めて、



玄關に降り立つた時、奥から、

『光雄ッ』

といふ叔父の聲が聴えた。戸口で待つて居た半造の眉が、ピリ、と動くのが眼に止まつた。

僕は致し方なしに、半造に一寸待つて居て呉れと云つて奥に行つた。

叔父は用事があるから今日は出てはいけなと申し渡した。僕は要用があるから、一寸でいゝから出して下さいと云つたが、叔父は承知しなかつた。そこで門の處で待つて居る半造の處へ行つて、此旨を云ふと、

『それでは、また何時かお會ひませう。今日は叔父さんの言ふことをお聞きなさい』

と言つた。

『それでは濟まないが左様してお呉れ』

『何も濟まないことはありません。——』と云つて一寸言葉を途切らして

『坊ちゃん、私の話をお聞き下さる迄、坊ちゃんはお苦しみになりませんよ』  
彼は斯う言つて聲を曇らしたが、又獨り言のやうに、『お可哀相に——』と言つた。

僕は何と言つてよいか判らなかつたから、

『それでは今日はこれで失禮するよ』

と云つて別れやうとした。

『はい、それでは又後日お目にかゝります』



『今歸つたのは誰かい？』

『半造です』

『ナニ、半造——何であんな者に逢うのか、あれはお前、泥棒じゃないか、火附けじゃないか。何故あんな者を引き入れるのだ』

『敵だから會うのです』

僕は殆んど無意識に斯う言つた。

『ナニ、敵だから會う。生意氣なことを言ふな』

『叔父さん、何もムキになつて、大きな聲を出さなくともいゝじやあり

ませんか』

僕は頗る冷静であつた。對手が猛り狂ふと猛り狂ふ程、冷静になるのが僕の子供の時から性質で、其頃は特にそんな風であつた。僕が冷静に構へると、叔父はいよく怒つた。

『貴様は生意氣でいかん。人が可愛がればいゝことにして付け上る』

叔父は一人でイキマゝて居た。僕にはその生意氣な理由が判らなかつた。

『おい光雄、今後あんな者と會ふことは斷じてならんぞ』

叔父の云ふことは何が何やら、些つとも要領を得ない。たゞ怒つてばかり居るやうであつた。怒つては居るが、怒る理由がわからなかつた。

『それから未だ話がある』



今度は斯う出て来た。こんな時には何でもハイくと聽従して居る方が  
いよと思つたから、

『何ですか』

と靜かに問ひ返した。

『何ですかもあるものか。貴様は信子を玩んだな』

愈々問題が持ち上つた、こりや大變なことになつた、と腹の中で心配し  
乍ら黙つて返事もせず居ると、

『おい、何とか言はんか。』

叔父は右手をグツと伸して、手にして居た煙管で僕の膝を衝いた。

『玩んだと云ふのは餘り酷です』

『ナニ酷だ。酷だとは何事だ、馬鹿奴が』

此の分では眞心を以て申譯なんかしても、とても耳に入るものでないと  
思つたから。

『叔父さん、僕が悪う御座いました。御免下さい』

『御免下さいで済むか。あの子供を何うするつもりか』

『叔父さん、さう怒らずに、どうか信子と僕と一緒にして下さい』

僕は短刀直入に斯う出た。實際僕の應答ぶりは、横着者の答辯のやうで  
あるが、これが僕の應答なし得る最上限であつた。斯う出るより外に術  
は無かつたのである。

『そんな事が出来ると思ふか。貴様は富塚の後を嗣ぐんだらう。信子は



此方の一人娘だ。そんな事が解らぬ奴があるか。この馬鹿者が——」  
 叔父はたゞくムカ腹を立て怒鳴つた。そして、煙管を以て僕の顔を打つた。煙管はポリツと折れ、僕の額からは血が流れ出た。叔父の怒つて居るのは、單に信子のことばかりではない。これは誰にもわかることである。

「叔父さん、何れにしても僕が悪いのです。此上は何うなりと叔父さんのお考へで、最もいゝ處分をして下さい」

「馬鹿つ、自分で自分の處分が出来なくて、人に處分をして呉れと云ふのか。この間拔け奴——」

今度は側にあつた湯呑みを打つ付けた。鼻と上唇との間に當つて、鼻血

がドツと出た。齒齦も破れた。唇も傷んだ。僕は手巾でそれを抑へたが、血が止め切れなかつた。ソコで立ち上つて、手拭か何か取りに行かうとしたら、

「何處に行くんだ」

と云ひ乍ら、僕の裾をグイと引張つて引き倒して、立上り様グツと横腹を蹴つた。僕はその時もう氣絶しさうであつたが、僕の怒氣がそれに打ち勝つたものか、スツクリ起き上つて、

「叔父さん、こんな事をするに云ふのはあんまりです。口で言つて下されば何でも解るじやありませんか」

「解らんから斯うするんだ」



叔父はたゞムカ腹を立て、その怒りに任せて僕を打ち、殴り、蹴つて、その怒気を散じやうとするらしかつた。斯うなると僕も叔父に對する甥としての義理を忘れて、怒號せざるを得なかつた。

『叔父さん、飽迄もそんな慘酷なことをするんですか。打つて蹴つてそれで信子の懷妊が解けるんですか。成程僕は信子と關係しました。併し、二人の仲には立派な愛があります。お互ひに心を許し會つた仲です。叔父さんが僕のお母さんを強姦しやうとしたやうな、そんな野蠻なことは僕は致しません』

僕は怒りに委せて叔父の舊惡の一を口走つて了つた。

『何だ。誰が強姦しやうとした。誰が——さあ誰が』

叔父は僕の襟頸を捉へて詰つた。

『誰がつて、叔父さんがです』

『何つ、俺がした。何時そんな事をした。此馬鹿奴が、失敬な』

と言つて、僕をまた押し倒して、散々に蹴つた。餘りに音が激しいので、叔母と信子が飛んで来て、叔父に縋り付いて押し止めやうとした。止めやうとすればする程、叔父は猛り立つた。

他人との喧嘩なら、昔ストライキの親玉をやつた腕を以て、決して負けは取らないのだが、甥といふ弱味は、流石に叔父に向つて握り拳を振り上げることは出来ず、おめくくと痛さ苦しさを忍ばねばならなかつた。僕はその夜病院に入った。



額の傷は軽かつたが、齒齦を破つた傷は重かつた。傷そのものは大したものでもないとしても、その傷が化膿した爲に飛んでもないことになつて、七十日間も病床に呻吟しなければならなかつた。

信子は附切りで看病をして呉れた。叔母は一日置きに見舞ひに来て呉れた。もう退院する頃になつて、半造も見舞ひに来た。叔母の家の方に伺つたら、病院に居るとの事で驚ろいてやつて來たと云つた。そして、その怪我の理由など聞いたが、僕はそれを言はなかつた。けれども信子がたつた一言口を迂らした。

『妾のお父様が、湯呑みを打つ付けたのよ』

この一言は半造の顔色をサツと變へたことを確かに見て取つた。僕は信

子のこの言葉を止めやうとしたが間に合はなかつた。

叔父はあの日僕を打擲した後で、叔母や信子を散々叱り飛ばして、フイと出て行つた切り、僕が退院する迄も歸つて來なかつた。

二〇

一體叔母や信子が、僕の家の大事件——木乃伊、泥棒、火事など——を知つて居乍ら、半造を知らないと言ふのは、一寸不思議のやうに思はれやうが、之には曰くがある。實を言ふと叔母も信子も半造と云ふ名は知つて居つて、其恐ろしい事件の首魁たることも充分承知なのだ。併し、彼女等は半造に會つたこともなく、それに彼女等は半造は最早此世に居



ないものと信じて居た。僕も最初は何うして彼女等が、半造を世に亡き者として居るのかと疑つて居たのだが、此頃になつて漸く合點が行つたと云ふのはあの叔父がそれを信じさせたのである。

處が、それと同名の不審な男が僕に會ひに来るやうになり、それ以來叔父の様子迄が一變するに及んで、如何に感じの鈍い人でも若しやといふ疑ひが起らずには居まい。況してや叔母は敏い方である。果然彼女は僕を掴まへて之を詰問した。是迄は叔母があゝの悪徒半造が死んだものと信じて居たから、僕にとりては非常に都合がよかつたけれど、今斯う言ふ詰問を受けるに及んでは、僕も聊かどきまぎせざるを得なかつた。

叔母の推察は意外の點まで行き届いて居た。彼女は半造と叔父との關

係は、事によると利害の關係ではあるまいかと云つて、

『これ程までに妾が一生懸命になつて居るのに、あなたは何處までもお隠しになつて、妾を苦しめるつもりですか。妾は自分の夫を悪人だとまて言ひ切つて居るのに、それで妾の心が解らないのですか』  
と、キリ／＼と詰め寄せて僕の答へを待つた。

『叔母さん、それ程までに仰しやるなら申上りますが、半造が死んだといふのは嘘で、叔母さんの推察通り、此頃やつて來るのがあの悪徒の半造です。併し叔母さん、僕は半造と叔父さんとの關係は全然知らないのです。これに就いては僕も解せない疑ひを持つて居るのです』

『それ御覽、ナゼそれを早く言つて呉れなかつたのです。——エ、口惜



しい』

叔母はワツと泣き臥した。

「叔母さん、そんなことは氣にしないでいよじやありませんか。それよりか、叔父さんの様子の變なことを調べて、あれを何うにかしなればなりませんまい」

「それで妾が心配して居るじやありませんか」

「心配したり泣いたり悲しんだり大變ですな」

「冗談處じやありませんよ」

「全くです。叔母さん、それでね、僕は近い内に半造と會う約束をしてあるんですがね、その時萬事今迄の事情を聞き訊して見ようと思ふんで

す」

「さう、あの半造が正直なことを言ひませうか」

叔母は半造を飽までも、悪人中の悪人らしく心得て居るらしかつた。

「そりや言ひます。少なくとも僕には言ひます。僕の前に嘘を吐くやうな男じやありません。叔母さん、半造は善人ですよ、叔母さん、半造は善人なんですよ」

叔母は不思議さうに、又呆れたやうに僕の顔を見て、

「光雄さん、あなた本氣でお言ひなの？」

「勿論本氣です。半造を悪人と云ふのは勿體ないです」

「まあ——」



叔母は呆然として何も言ひ得なかつた。

「叔母さん、何をさう呆れて居るのです。兎に角、僕が半造と會つて話を聞けば、大方のことは解りませう。さうすると叔父さんのことも判然しませうから、それ迄は黙つて居て下さい。その上で叔父さんのことも何うかしやうじやありませんか。僕も此頃は少し考へて居ることもありますから——」

此話をしたのは、退院してから四日目のことであつた。この問題の話がこれで一段落を付けて、それから下らぬ世間話——叔母の口説き話を聞き乍ら、お茶を飲んで居ると、ソコへ叔父がフラリと歸つて來た。長い病院生活で少し糞れた僕の姿を、まじく〜と見てニヤリ笑つて居たが、

「光雄、片輪になり損なつたな」

叔母と、奥で裁縫をして居た信子と、女中のお繁と、僕と四人が揃つて玄關に出迎へて、お歸りなさいと言つた時にも、たゞの一言も發せず、點頭きもせず、笑ひ顔も見せなかつた叔父が、歸宅後第一に發した言葉は、實に斯の如くであつた。僕はムツとした。

「ハ、ア癩に障つたと見えるな」

叔父は僕の顔色を覗いて斯う言つた。僕はこゝに居ては癩に障るばかりと思つて、自分の部屋に行かうと思つて立ち上つた。

「逃げる氣かい」

「いゝえ、用事がありますから——」



『何の用事かい。お前はこの世に用事のない男だ』

叔父の言葉は何處までも突拍子に出て、殆んど掴み處もない悪口ばかりであつた。口答へしては反つて悪いと思ひ、黙つて廊下に出て楷子段の處まで來ると、後ろからズドンと一發短銃の音がしたかと思ふか思はぬ間、僕はバツタリ仰向けに倒れた。

叔母は叔父に飛び付いて短銃を抜き取らうとしたが、叔父は叔母を突き除けた。信子と繁とは僕に縋り寄つて、僕を抱へ起した。すると叔父がバタ／＼と馳けて來て、物も言はずに信子の横腹を蹴倒した。信子はキヤツと叫んでその儘氣絶した。叔母は狂人のやうになつて、信子を抱き起して『信子信子』と叫んだ。繁は僕を抱へたまゝ途方に暮れて、ワナ

ワナと慄えて居た。叔父は此光景を見乍らニタリ／＼笑つて居た。重傷は負つても、叔父のその態度を見た僕は、俄かに怒氣が發して、痛手も忘れて起き上り様、叔父の手にして居た短銃をかなぐり取つた。

あゝ併し、その時の叔父は、最早正氣の人では無かつた。

『ハツ、、、フツ、、、』

叔父は大きな聲で笑つた。狂人の笑ひ聲は何處とはなしに淋しい。

## 二一

事件は絶対に祕密に附し去らうとしたけれど、翌日の新聞は一號活字の見出しで、狂人娘と甥を殺さんとすと云ふ様な風の記事を掲げた。併



し事件の真相は總て憶測で、全く虚構の事のみであつた。たゞ其の誤りなき點はと云へば、僕の傷は腹部貫通傷で生命には別條が無いと云ふ事、信子は一時氣絶はしたが直き恢復したと云ふ事、たゞこれだけであつた。四五の新聞を通讀し畢つた時、僕はホツと息を吐いて安心した。といふのは、僕の第一に心配したのは、信子の妊娠が世に公けにされはしまいかと云ふことであつた。然るに幸ひにして其事は無かつた。たゞ意外に感じたのは、何の新聞でも叔父の性行——發狂前の——に就いて、濃厚の人であつたと書き立て、其發狂の理由が那邊にあるか解らないと云ふやうなことを附加してあつたことであつた。

斯様な記事が出たその日の夕刻、半造は血相變へて病院に見舞ひに來た。

『新聞で拜見いたしましたしてな、驚ろいてやつて來ました。坊ちゃん大丈夫でせうな、確かりなさいましよ』

彼の言葉附きから察すると、餘程狼狽へて居る様子であつた。

『僕の傷は大したことが無い。斯うして居ても、些つとも痛みもしないし、苦しくもない。傷は腹の左側をチョツとかすつて行つたやうなものだ。大丈夫だよ』

とは云つたが、物言ふ時には一種の響きが傷に應へて痛かつた。それに其時は大分熱も高まつて居たのであるが、その日の新聞の記事が僕の氣の緩むのを支へて居たので、存外我慢も出來たし又それ程に痛みも感じ



なかつた。

『眞實ですか。大丈夫ですか。大分お顔色がお悪いやうですから——』

『そりや悪くもなる譯じやないか。何と云つても斯うして安臥しなければならぬ位の傷なんだもの、それに退院してから間もないことだもの——』

『あちらのお嬢様も氣絶なさいましたさうですが、如何ですか』

『うむ、癒つたよ。あれはほんの一時さ、明日は見舞にやつて來るかも知れない』

『さうですか——』彼は密つと吐息を漏して、『叔父さんも酷いことをなさいましたね』

『氣が狂つたんだもの、氣狂ひに愚痴をコボシたつて仕様がな——』  
僕はもう、叔父といふ言葉を聞くことさへ厭であつたから、

『半造、叔父のことはもう何も言つて呉れるな——』とは言つたが、直ぐ、『併しね、半造お前に聞き度いことがあるが、お前は叔父を見ると、

何故あんなに厭な顔をするんだい？』

半造はグツと顎を引いて、胸に物が支へたやうに、暫らくは何とも言はなかつたが、

『坊ちゃん、それは先づ訊かないで下さい。何れ委しくはお話は致しません。何よりも先づ早く全快つて下さいまし』

彼はこゝで事情を言ふことを避ける風であつた。僕もこれ以上追求した



くもなかつた。

二十有五歳の僕を掴まへて、今日もなほ『坊ちゃん』と云ふ半造の心根は優和しいものだ。『あなた』といふ言葉を呪ふた僕は、『坊ちゃん』と言はれるのを此上ない愉快の事に思ふた。半造が『坊ちゃん』と云ふ度に、看護婦は口を抑へてクス／＼笑ふたけれど、笑ふ看護婦の根性が怨めしかつた。僕は何時迄も何時迄も『坊ちゃん』と言はれて居たい。また『坊ちゃん』で居りたい。

願れば二十有五年、身の表面は順境に生ひ立つて、幸福者の如く今日に至つたのであるが、その内面の生活は決して歡樂の夢では無かつた。六歳にして大秘密の緒口を發いた僕は、これが爲に悶え苦しんで今日の

状態にある。二十年來の延田一家の大事事件なるものは、總て皆これこの僕が醸成したものと云つてよい。あのお常婆やの家の襖一枚を押し開けたが爲に、こゝに自殺、泥棒、放火、殺人、喧嘩などの大悲劇大活劇が演出された。僕の思ひは色々に轉じて、二十年前の昔から傷いた今日迄、一瀉千里に事件の成り來りを描き去つて、悔恨追憶の涙よりは、恐怖の心に冷汗の流れ出るのを覺える。而して、此の長き大芝居の立役は、今眼前に目をつぶつて物思ひに沈んで居る半造である。綾子さんの如き、信子の如きは、ホンの添へ花に過ぎない。然し僕にとりては此の添へ花の方が大事らしく思はれて、何うしてもこれを此舞臺から除き去ることが出来ぬ。然り、僕は此境遇に在りて、なほ光明と一片の元氣とを持つ



て、此世に生きて居るといふのは、實に戀あるが爲である。戀は人間の生命であつて、如何なる辛苦も、如何なる煩悶も、如何なる生活も、この戀の堂奥の中に籠る時に、これを忘れこれを慰さめこれを樂しむことが出来る。戀の苦しきは戀の歡樂の大なるを意味する。まゝにならぬ戀がまゝにならぬだけ楽しいのである。僕は順境の戀を樂しんだ。されど之が反つて僕を苦しめる原因となつた。

人間は苦痛なくして生きることは出来ぬものである。僕は戀の苦しみを知らぬ代り、苦痛を他より得た。若し僕が戀の苦痛に悩んだならば、恐らくは、木乃伊事件の如き、今日迄生命を持続しなかつたかも知れない。併し、想像は遂に想像である。愚痴を云つたとて、不平を言つたとて、

理屈を云つたとて、議論を持ち出したとて、事實は飽までも生ける人間を支配して行く。人間を支配するものは、何と云つても事實だ。實行だ。僕の考へは最近の事實よりも、遠き昔の追憶に走つて行つて、身の現在を如何にしやうなどといふ事には思ひ及ばなかつた。人は想像を樂しむ動物である。空想を樂しむ動物である。未來のこと、過去のことを、色々に思ひ廻らして、自分の都合のいゝやうなことを案出しては、一人でホクソ笑んで居る。氣狂ひのやうなものだ。

僕がこんな取り止めもない下らない事を考へて居る間、半造も看護婦も沈黙して居た。病室は森閑として、廊下を行く人の足音のみが、五月蠅く耳にいつた。



『馬鹿々々しい』

僕は何の氣もなしに突然斯う一人言した。

『エツ、何が馬鹿々々しいのですか』

『いや、つまらぬ事を考へて居たもんだから、自分で自分が馬鹿らしくなつたんだ、ハ、ハ、』

## 二二二

叔父は其後奥の座敷に閉ぢ籠められて、叔母と看護婦の看護を受けて居た。あれ以來別に亂暴なことはしないが、始終獨りでグヂヤ／＼喋舌つては、大きな聲でカラ／＼と笑ひ出すのであつた。そして毎日の様に

二度か三度は、必らず

『光雄、光雄、貴様は何故死な／＼なのだ。早く死ねばい／＼に——』

と云つて、僕の死を望むのが常であつた。斯様な具合で、叔父は全然僕を忌み嫌つて居ることが解り切つて居るので、僕が殆んど全快して退院して後も、一切叔父の顔を見ぬやうに、叔母と相談の上で定めた。

それから信子のことであるが、彼女は彼の時以來身體具合が餘り宜しく無かつた。それで念の爲に醫者に診て貰うと、胎兒がもう死んで居るとの事だつた。之には信子は勿論、叔母も僕も顔の色を失つた。然し棄てゝは置かれぬので、胎兒を出して了ふことにした。醫者は既に流産する筈なのに、流産しないのが不思議だと云つて居た。



手術と云ふか何と云ふか知らないが、信子の死見を引き出す術は、幸ひに巧く行つた。経過も頗る宜しくこの方は一安心したが、此事あつて以來、僕が豫め心配した通り、僕と信子との關係が、世間の評判に上るやうになつた。意地の悪い新聞記者は、態々訪問にやつて来て、役にも立たぬことを聞き質して、明日の新聞に書き立てるやうなことを言つた。叔母はそれを心配して幾らか紙に包んで、それとなしに口止めをした。無冠の帝王も金の前には眼が無いものと見えて、幸ひにして新聞紙上の問題とはならなかつた。僕等の第一に心配したことは、叔父の短銃事件と、僕と信子との關係を結び付けられることであつた。あの短銃事件は兎にも角にも世を騒がした大事件で、その裏面に如何なる事情があるか

と云ふことが、未だく世間の疑問になつて居た時だからであつた。然し、これは何うやら無事に吳魔化された。

一厄去つて又一難、その頃の僕は全く立つ瀬も浮ぶ瀬もないものであつた。僕の身體は何うでもいゝが、間にある信子こそ實に可哀相なもので、彼女は全く犠牲者であつた。而して、その犠牲が眞實に犠牲とならねばならぬやうな事件が又突發したのであつた。

或日、菱井と云ふ人相の悪い、五十格好の男がやつて来て、叔父に面會を求めた。叔父は發狂して人に會へないと答へると、それでは奥さんに會ひ度いと云ふので止むを得ず叔母が應接した。物の三十分も話して居たかと思ふと、叔母は僕の部屋にやつて來た。その顔は非常に蒼かつ



た。

『光雄さん、困つた事が出来ましたよ。——大變なことが——』  
叔母の聲は慄えて居た。

『何ですか叔母さん——』

『何うしたらいゝでせうね。妾もう死んだ方が増しよ』

叔母は事柄も云はずに、嘆聲を發した。僕には何のこともか解らなかつたから、

『一體何うしたと云ふんです?』

『まあお聞きよ——あの方はね叔父さんの知人なんださうですがね、叔父さんと約束があるから信子を貰ひに来たと云ふのよ——』

『エツ、何ですつて——信子を貰ひに?——そんなに唐突にですか』

『エ、話は頭からそれなのよ、私は餘り解せないことだから、さう突然では私としては直ぐお答へ致し兼ねます——良人が何んな約束をしましたか、私には些つとも知らないことですから——と答へるとね。そんな馬鹿な話があるものですか。娘を呉れるのに自分の妻に話して無いといふ筈はありません。一體この約束はもう二ヶ月前のことで、二ヶ月前にもうお嬢さんを引き取る手筈になつて居たのですが、それ以來何の便りも無く又山岡君も顔も見せもしませんから、今日態々やつて來たのですと云ふのよ』

『それでは、その約束と云ふのは、一體どんな風になつて居るのですか』



『それは解らないのです』

『それを訊いて見なくちや——それからその男と云ふのは、何處の何者  
なんですか』

『私もそれを尋ねましたけれどもね、それは申上げる必要はないと云つ  
て答へて呉れないのです』

『そんな馬鹿な無法な話があるもんですか。』

『でもまあ、一體何うしたらいいでせうね』

叔母はもう泣いて居た。

『宜しう御座います。僕が會つて事情をよく聞いて見て、話を纏めて見  
せます。安心して居なさい。』

その時はかりは、僕も昂然となつて斯う言つた。信子の一身に關する、  
否、叔母一家僕一身の上に關する大問題である。僕は度胸を定めて階子  
段を降りた。心の中では菱井と云ふ男は悪徒に相違ないと定めて居た。  
叔父と關係がある以上、決して宜しい人間ではないのである。

## 二三

僕が入つて行くと、菱井は變な眼付きをして僕を睨んだ。彼は立派な  
身装をして居た。身長が小さいから洋服は餘り似合つて居なかつたが、  
その地質は極めていゝものを着て居た。服よりも何よりも第一に眼に付  
いたのは、左手の薬指に籍めた大きな金の指輪であつた。



『僕は山岡の甥ですが、叔父は精神病で人に會ふことが出来ませんから、御用の趣きの一切は、僕が代理として萬事承ります。實は叔母が御應へする處なので御座いますが、込み入つた事件のことですから、未だ若輩ではありませんが男子たる僕が全責任を負うて御相談に應ずることにして來ました。何卒か僕を信じて御話を願ひます。』

斯様な長口上は、生れて以來初めて竝べ立てたのであるが、出放題も存外巧く行つたわいと、腹の中で思つて居た。

『は、あ、左様ですか。さうすると君が萬事を引き受けて下さるといふのですね』

彼は意外にも優和い聲で、静かな調子で斯う言つた。僕は太い不遜な聲で、僕を威壓するだらうと思つて居たのであつた。

『さうです』

『私は菱井と申す者で、山岡君とは三十年來の知己なんです、先頃不圖した話から、お嬢さんを私の養女として貰ひ受けることに約束したのですがな——それは先程もう奥様に申上げて置きましたこと——』

『はい、その事は叔母から聞きました。——それはさうと貴殿は只今何方にお住居なんで御座いますか』

『私の住居ですか。私の家は大阪なんですが——』

彼は斯う言つて言葉尻を濁した。

『大阪は何方ですか』



彼は一寸答へに躊躇したが、

『私のことは山岡君がよく存じて居りますから——』

こゝで吳魔化されて溜るものかと思つた僕は、

『叔父はよく知つて居りませうが、何と云つても只今は狂人のこと、何卒ぞ御住所だけは御知らせを願ひます。此先き如何やうな用事が出来て、御伺ひしなければならぬ事が出来ぬとも限りませぬから——それに事によつては信子も参らねばならぬこと故、御處は是非御知らせを願ひます』  
彼は餘程當惑した様子であつたが、

『私は只今芝口の紀伊國屋に宿つて居ります。東京に参りますれば何時でもあちらに宿ります』

『ハ、ア左様で御座いますか。それでは紀伊國屋に尋ねますれば、大阪のお住居も解りますね』

僕は態と皮肉に出てやつた。

『エ、、、』彼はかくあやふやにして、『それで早速あのお嬢様の一件なんですが——』と逃げた。

『信子のごことは解つて居りますが、これは一體如何云ふお話になつて居るので御座いますか、信子は何と云つても當家の一人娘、他所に出すことなぞと云ふ話は、今日が初耳で御座いまして、全く驚ろいた次第です』  
『いや、それは君方の逃げ口上でせう。何と云つても娘一人を他所にやること、家の中の人にこの事を話さずに、自分一人の一所存で決めるな』



どいふことは無い筈です』

彼は巧みにヒツカケテ來た。

『いや、全く初耳で御座います』

『そんなことを言つて、山岡君の發狂をいふ都合として、私との約束を破らうなんて言ふのは、そりや餘り御無理でせう』

彼はいふ言葉を使つて、毒々しいことを言ふのであつた。

『それは邪推といふものです。叔父のやうな人間なら、如何様ことをするか知りませんけれど、叔母や僕は少し質が違ひますからね』

僕の癢はそろ／＼動き出して居たから、言ふこともいやにヒネクレテ來た。

『はゝあ、流石は山岡君の甥ですな』

彼は上を向いてプツと煙を吐いた。

『悪徒の眼には人間は皆悪徒に見えるものださうですからね』

『何ですつて？——今の言葉は聞き捨てになりませんな。君は私を指して悪徒と云つたのですね』

『いゝえ、そんな譯でもないですが——』

『そんな譯でもないと云へば、少しは心あつて言つたのですな。失敬なことを言ふもんじゃないやありません』

彼は敷島の喫みかけを、ポンと火鉢の中に棄て、グツと身をそらした。『言葉尻を掴まへて喧嘩をしても埒が開きません。兎に角、お話を決め



て了ひませう』

僕は彼がそろ／＼本性を出しかけて来たと思つたから、急に話を斯う轉じた。

『話を決めると申しましても、たゞお嬢さんを私に引き渡して下されば、それでいゝのです』

『それは出来ません。少くとももう少し事理が判然せぬ以上は、決して信子をやることは出来ません』

『出来ないと仰しやるのですか』

『たゞ貴殿の今迄申されたことだけではいけません。斷じていけません。約束の真相を明瞭に説明して下さる迄は、どうあつても駄目です。貴殿

の言はれることだけでは、僕から見ますと宛で、信子を強盗にやつて来たやうなものです。強盗とまでは行かなくとも、確かに恐喝ですな』  
口が迂つたなと思つたが、もう遅かつた。  
『何つ、強盗だ、恐喝だ。失敬な、もう一度今のことを言つて見ろ』  
彼の態度は忽ちにして一變した。

二四

菱井と僕との口論は、危機一髪の點まで進んで、暴力沙汰に迄ならうとしたが、何と思つたか菱井が急に折れた。

『宜しい、今日は先づ兎に角之で歸る。その代り後日必らず無條件で、



あの小娘を奪ひ取つて見せる。否、それが約束なんだ。——ようく覚えて居るがいゝぞ、この菱井は山岡の祕密を握つて居るのだ。山岡を殺さうと生かさうと、貴様達を苦しめやうと黷らうと、その自由はこの菱井の胸の中にあるのだ。ようくこれを覚えて居るがいゝ——』

彼は遂に本音を吐いた。僕も腹の中では、叔父が何か此男には頭の上らぬ點があつて、否應なしに信子をやることを約束したものだらうと想像して居た。而して、若しさうであるとすれば、叔父が發狂して了つた今日となつては、假令菱井がその祕密か何かを種に、いくら威張つて見ても毫しも威嚇にならないのだとも思つた。それ迄は僕の考へが進んで居たから、存外大膽に悪口することも出来たし、又喧嘩腰にもなれたので

あつた。そればかりでなく、僕の心には如何なることが出来しても、斷じて信子を渡さぬと云ふ決心があつたのだ。いざと云ふ場合になれば、國家の法律が必らず之を成敗するに相違ない。叔父の身體はどうなるか知らないけれど、若し法律が物を云ふ段になつたら、信子は菱井の手に奪れるやうなことは、斷じてあるまい。僕は法律の手を煩はしても心を定めて居た。つまり、叔父を犠牲にしてもと思つたのであつた。

菱井は捨詞を後に辭し去つた。菱井が歸ると直ぐ叔母が隣室の襖を排して出て來た。

『まあ、何うなることかとハラ／＼して居ましたよ。それにしても、此後どんなことをされるか、私はそれが心配でならない。光雄さん、後を



どうするお考へなの？』

『何んなことがあるものですか。大丈夫ですよ。僕が居る間は安心しておいでなさい』

と氣強く慰めてやつたものゝ、僕の腹にも不安の念が一杯になつて居たのであつた。

『でも油斷がならないことよ。如何なことをされるか解りませんよ。』

『ナニ、大丈夫』

『それから、叔父さんを生かさうと殺さうと、勝手になるやうなことを言ひましたがあれは如何したと云ふのでせう？』

叔母は心配さうに斯う尋ねた時、僕は言ふに言はれぬ悲しさが胸に込み

上げて来て、ハラ／＼と熱い涙が溢れ出た。叔母が叔父のことに就いて、僕に詰問したのは、十度や二十度のことではなかつたが、僕は何時でもそれを拒絶して居たのであつた。けれども、その日に限つて僕は自ら進んで、叔父のことに就いて、叔母に打ち明けてやらねば氣が濟まぬのであつた。

『叔母さん、菱井と叔父さんとの關係は、僕も全く知りません。けれども、今日はたつた一言、叔母さんに打ち明けて置き度いことがあるのです』

『何ですな——まあ光雄さん泣いて居るの——』  
さう云ふた叔母も泣いて居た。



『叔母さん、あなたは不幸なお方です。憐れなお方です。僕はとうの昔から叔母さんの爲に泣いて居たのでした。天下廣しと雖も、叔母さんの爲に同情の涙を注いで居た者は、恐らくは僕一人でせう。若し外にあるとすれば僕の父です。これから先きは知りませんが、是迄叔母さんの爲に泣いて居たのは、全く僕一人なんです。叔母さん自身も泣いたことは恐らくありますまい。叔母さんが悲しき思ひに悩み初めたのは、ほんの最近のことで、それ以前の叔母さんは幸福な人であつたのです。然し、その幸福な叔母さんに對しても、僕はやがて来るべき悲しき運命を思つて泣いて居たのでした。僕は幾度かこれを打ち明けて、叔母さんを早くこの悲しき運命から逃れさせやうと思つたのでしたが、つい躊躇

して今日になつて了つたのです。けれども僕は、必らず叔母さんを助け叔母さんを慰める爲に、全身全力を擧げるといふことは、豫てから心に決して居たのでした。』

叔母はこの以外の言葉に驚ろいたやうに、夢中になつて傾聴して居た。

『光雄さん、それは如何したといふことなのです。私には些つとも腑に落ちません』

『叔母さん、驚ろいてはいけませんよ。決して驚ろいてはいけませんよ。若し、これが爲に叔母さんが變つた了簡でもお持ちになるやうなことがあつては、僕の同情の心も無駄になつて了ふのです。いゝですか——』  
『エ、決して驚ろきません。』



『それから、今後如何なることがありましても、萬事は僕が必ず處理いたしますから、安心して僕にお頼りなさい。僕が生きて居る限りは、叔母さんを必らず勞はりますよ』

『光雄さんの心はようく解つて居ります』

『僕が世話になつて居る癖に、却つて叔母さんを助けるんだなどと云ふと、厚がましい勝手な申分のやうですが、そこには又外の意味があるのですから、お氣を悪くして下さいませぬ』

『いゝえ、決して左様ことなど——』

『それでね叔母さん、——實は——叔父さんはね——叔母さん、驚ろいては駄目ですよ。——決して驚ろいてはいけませんよ。——叔父さんは

決して眞面目な商買をやつて居る人ではないんですよ』

『眞面目な商買をしないとは——』

叔母はおどくするやうな目付で僕の顔を見た。僕はその可憐な目付を見た時、急にいたましさ加つて胸が支へるやうな氣がした。而して、云はんとした事がもう出なくなつた。

『その商賣と云ふのは——まあ之は云ひますまい』

『そこ迄口に出して後を言はないと云ふのは、そりや——』

『え、云ひます、叔母さん、それも云ひますがね、僕が如何様な意外なことを言ひましても、決して驚いたり騒いだりしてはいけませんよ』  
『それはもう承知して居るじゃありませんか。それをクドクしく念を



押すのは光雄さんも随分ね』

『ですけれど實際言ひ憎いんです。叔母さん、叔父さんの商賣はまあ兎に角としてぐすね——叔父さんは實を云ふと——』

僕は又言ひ漉つた。  
『實を言ふと何です、早く言つて下さいよ。私は光雄さんを信じて居ますから——』

『實を言ふと——叔父さんは、人を殺した天下の大罪人なんです』

『エ、ツ——』  
叔母は血相變へて氣絶したかのやうに俯臥した。

### 有情無情終

大正五年十一月二十八日印刷  
大正五年十二月一日發行

定價金五十錢

不許複製  
有情無情附

著者 橘 刺 紅  
發行者 池田 林 儀  
印刷者 渡邊 八太郎  
印刷所 日清印刷株式會社

發行所

東京市本郷區駒込吉祥寺町二十番地  
振替口座番號東京三二八一八番

天 洋 社

大賣捌所

東京堂 上田屋 東海堂  
北隆館 至誠堂 盛文館



天 洋 社 發 行 圖 書

刊	近	刊	既
<p>浮世哲學 定價金五十錢(送料四錢)</p>	<p>橘刺紅著 續有情無情 定價金五十錢(送料六錢)</p>	<p>匿名子著(再版) 生存<small>る</small>藤村操 定價金三十錢(送料四錢)</p>	<p>橘刺紅著 立志道話 定價金四十錢(送料四錢)</p>
<p>著者三年の勞作は遂に上梓せられたり。著者一流の處世觀、人情論、生活訓、食物論特に婦人の一讀を要す。簡易平明の文、卑近剴切の引例々話、手にする者皆卷を置くを忘る。家庭必須の通俗圖書なり。</p>	<p>有情無情の終篇なり。怪奇は愈々怪奇を生み、主人公光雄の運命は益々悲惨を極め、佳人信子の境遇また哀れむべし。半造の告白によりて黒幕は遂に除去されたり。</p>	<p>華嚴の瀧に投じて自殺せる青年哲學者の半面と、その復活後の人生觀を述べたるもの、文章輕妙叙事警拔天下の奇書。</p>	<p>東西古今の偉人傑士の面白き逸話四十餘を蒐め立志修養の道を面白く平易に説ける青年の修養書なり。大正の自助論なりとして好評噴々たり。</p>



11  
54



終

